

支え合いマップづくり 聴取問答集



● …要援護者・気になる人
★ …世話焼き

黒い線が、身内の関わり

赤い線が世話焼きの関わり

住民流福祉総合研究所〈木原孝久〉

〒350-0451 埼玉入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話・049-294-8284

Eメール kiharas@msh.biglobe.ne.jp

ホームページ <http://www5a.biglobe.ne.jp/~waku/>

本書の読み方

本書は、既刊の「支え合いMAP作成マニュアル」（筒井書房・現在は入手不可）の中の第3部を抜き出したもので、支え合いマップづくりの聴取の際の、聴取者と対象住民との問答をフローチャートで再現したものである。実際の聴取では大体1時間半はかけるので、その全部を再現したら、膨大な量になる。本書ではその中の、特に重要な部分に絞って再現した。

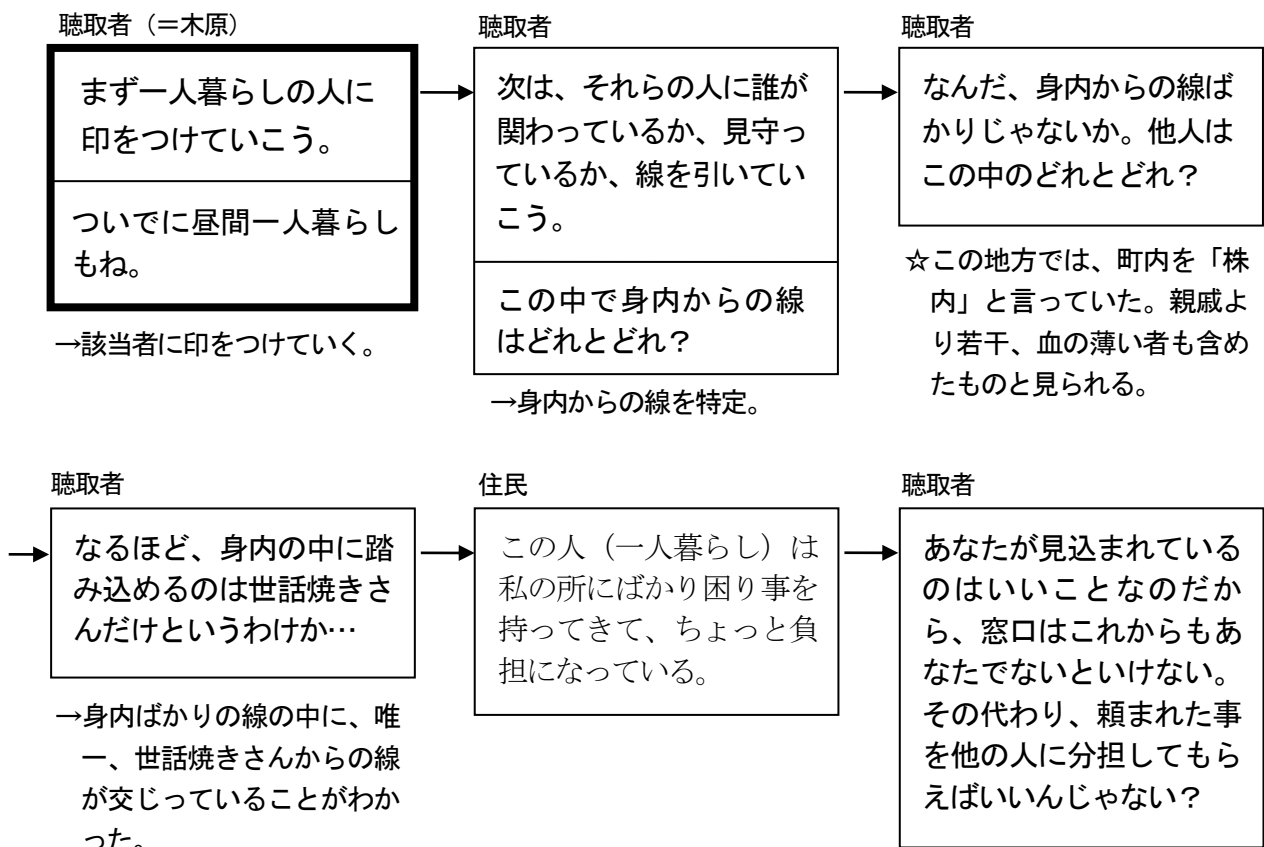
聴取される住民は、質問されたら答えるという受け身の姿勢を貫いている。だから、こちらがどういう質問をするかが正否を決する。マップをじっと見て、そのご近所の実態を読み、または推測して、どういう質問をしたらいいかを考える。その質問にどういう答えが返ってくるかも予測して、次の質問を考える。極めて創造的な営みなのだ。

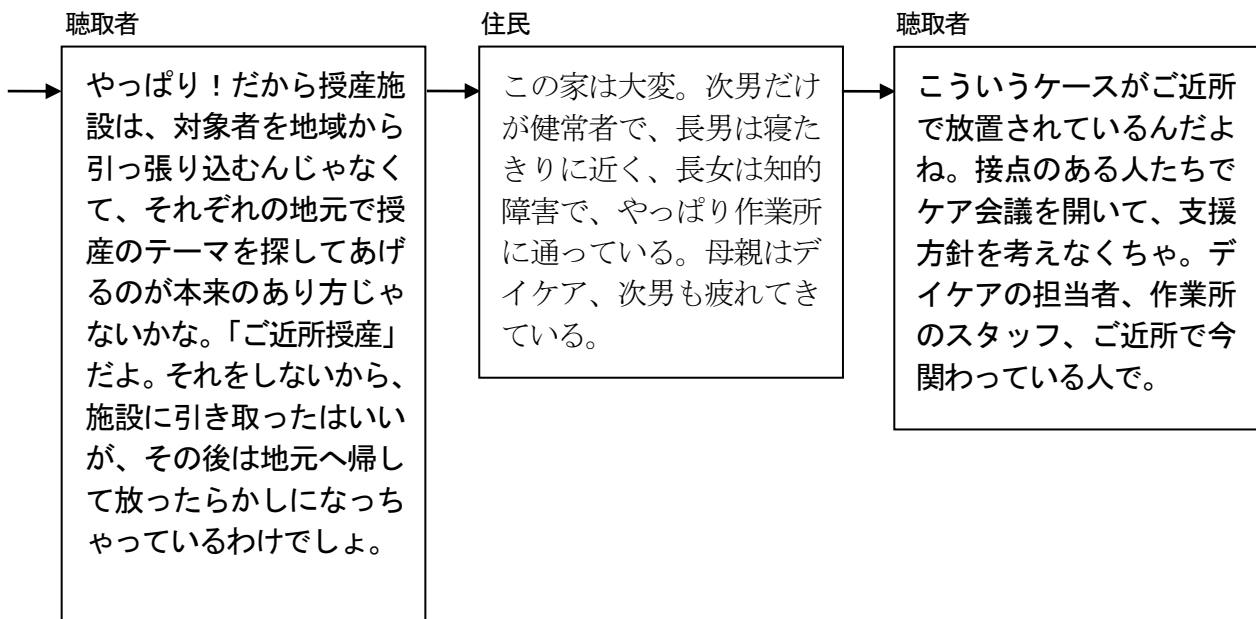
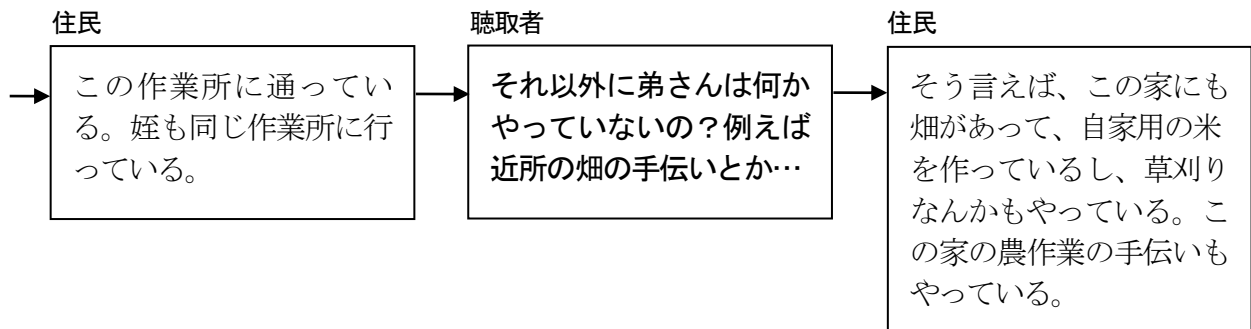
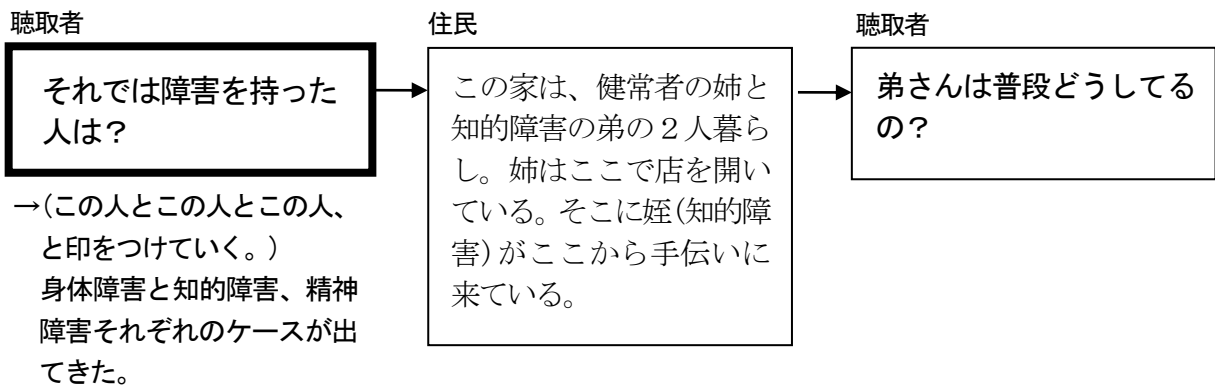
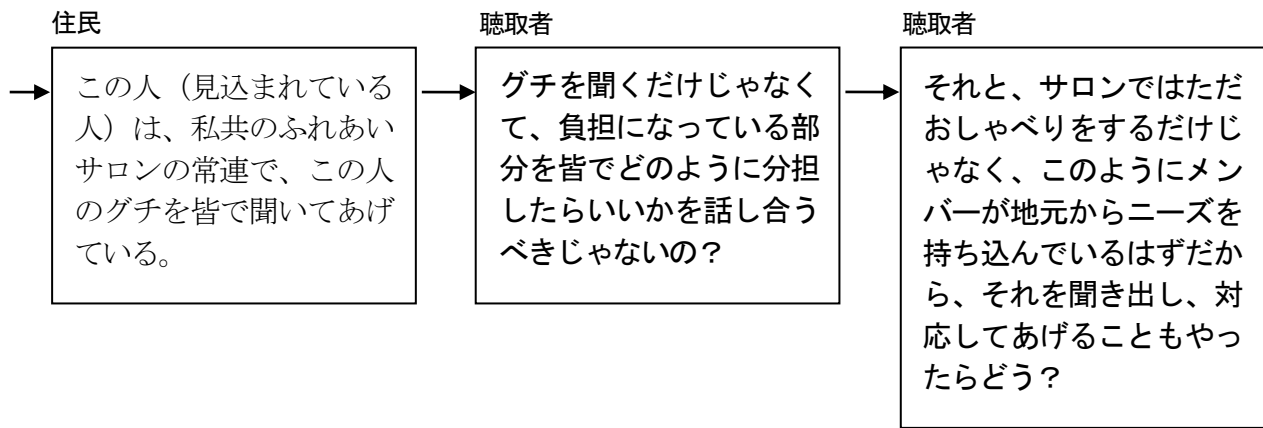
<目次>

- 1.見守り活動の欠陥を突く／3
- 2.見守り状況を個別に、ていねいに／6
- 3.不審な点、気になる点を詰めていく／8
- 4.世話焼きから見事な活動を引き出す／10
- 5.当事者の動きを追っていったら／12
- 6.マップ作りの場で対策のアドバイスも／14
- 7.引きこもりの接触相手を探すには／15
- 8.在宅介護のケースでニーズを先取り／16
- 9.大人の障害者のケースも先取り質問／19
- 10.呼び水を与えれば、予期せぬ答えが／21
- 11.マップに出た奇妙な事実を見逃すな／23
- 12.サロンボラの要求水準を上げさせる／24
- 13.サロン仲間で助け合っているか／27
- 14.有償グループも助け合っているか／28
- 15.団地の住民に何を尋ねるか？／30
- 16.「新旧住民の交流ない」にどう対応／33
- 17.シャッター通りの商店にやる気を／35
- 18.少子化のご近所にどんな対策を？／38
- 19.限界集落からの脱出策考え出せ／41
- 20.支え合いマップは手品ではない／44

1. 見守り活動の欠陥を突く

- ① 見守り等の線がたくさんあるが、大抵は身内からの線であることがわかる。「他人からの線」を探すこと。
- ② 引きこもりの人も、特定の1人は見込んでいる。しかしその人に重荷が集中しているのが問題。さてどうするか。意外な展開がその後に…
- ③ ふれあいサロンのあり方のヒントがここから出てきた。
- ④ 授産施設のあり方に大転換を促すヒントが出てきた。本来は「ご近所授産」が正解だったのだ！
- ⑤ 娘と認知症の母の2人暮らし。しかも娘は夜、働いている。娘の勤め先、母親の昔の仕事などを聞き出したら出てきた意外な対応策。





聴取者

この家がこの近所で一番大変な所だから、世話焼きさんたち（5～6人見つかった）で集中的に支えてみたらどうか。

聴取者

認知症の人はいるか？

住民

この家の母親が認知症で娘と暮らしている。娘は夜勤の仕事をしているので、夜でかける時、玄関にカギをかける。

聴取者

娘はどういう所で働いているの？

住民

グループホームで働いている。

聴取者

なんだ、それじゃ職場に母親も連れて行ってボランティアをしてもらえば一石二鳥じゃないか。
施設も助かる、本人も生きがいになる。娘は働きながら母を看れる。

住民

母親は付き添い婦をしていたこともある。

聴取者

じゃあ、ますます好都合だ。

住民

そう言えば、この家にも畑があって、自家用の米を作っているし、草刈りなんかもやっている。この家の農作業の手伝いもやっている。

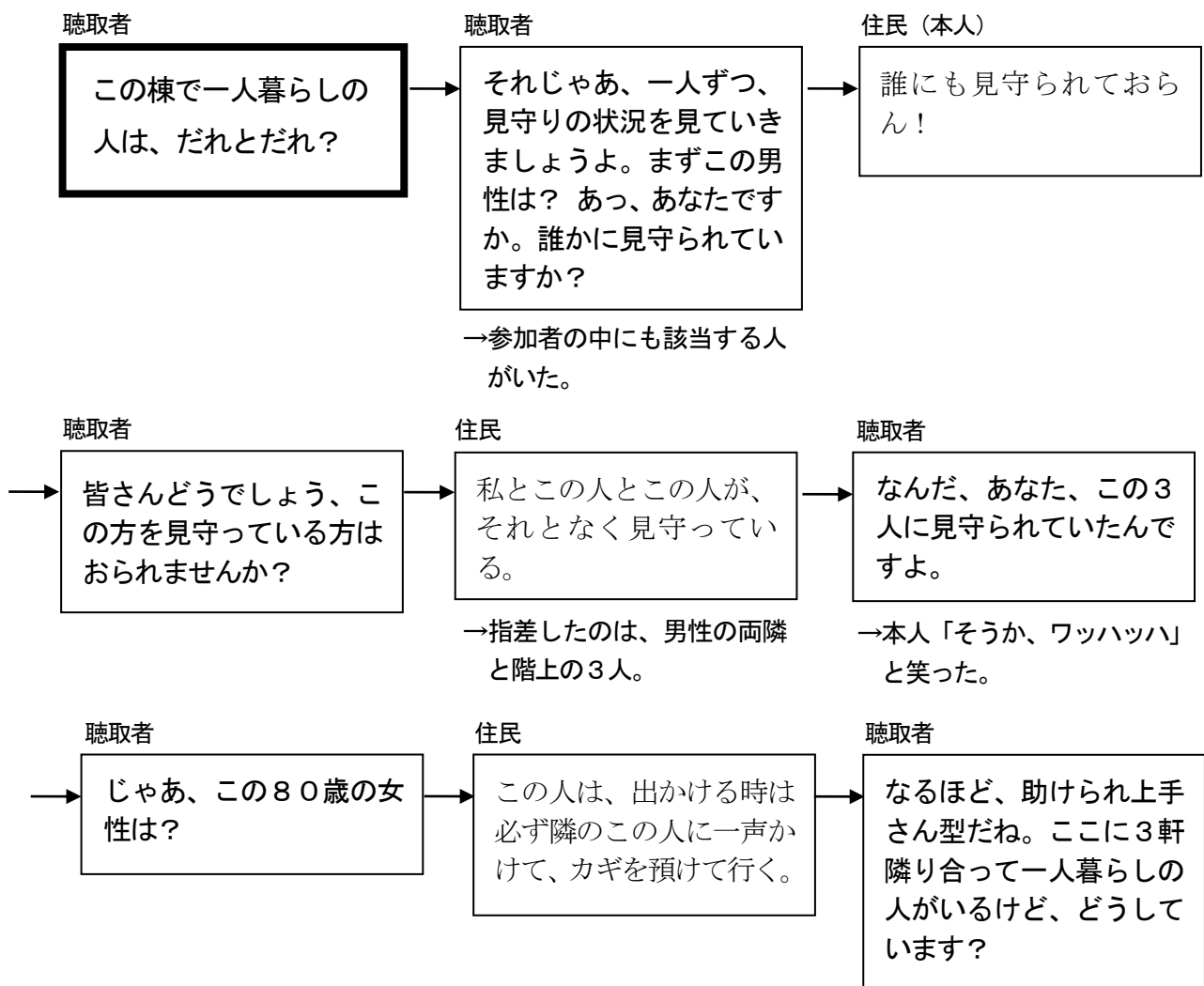


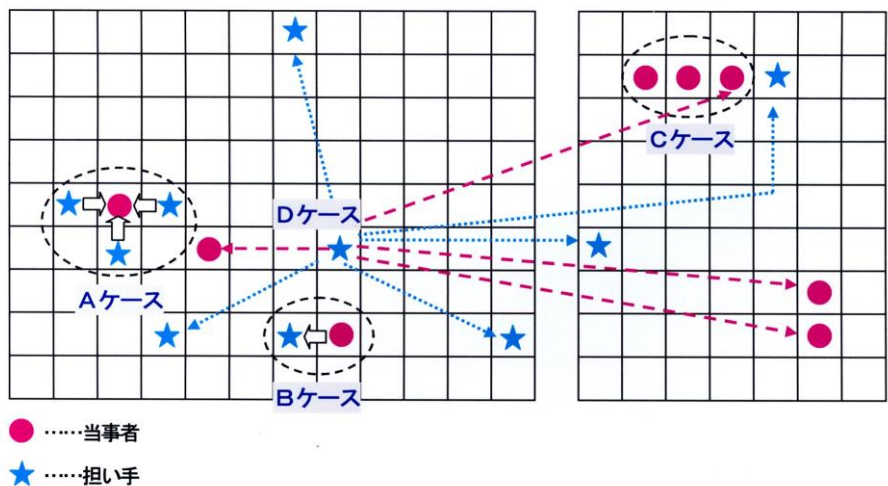
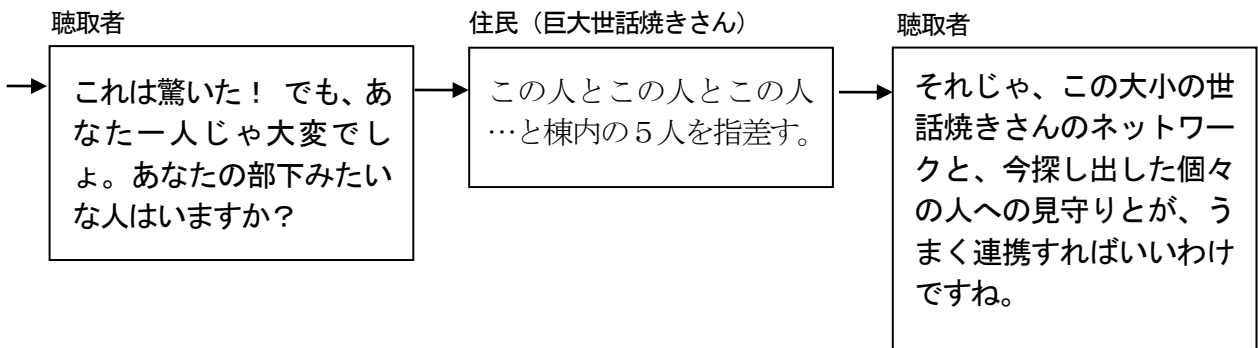
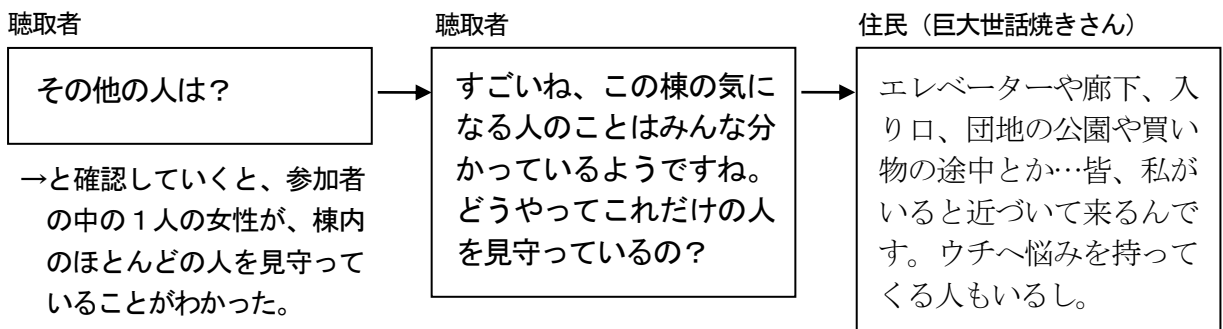
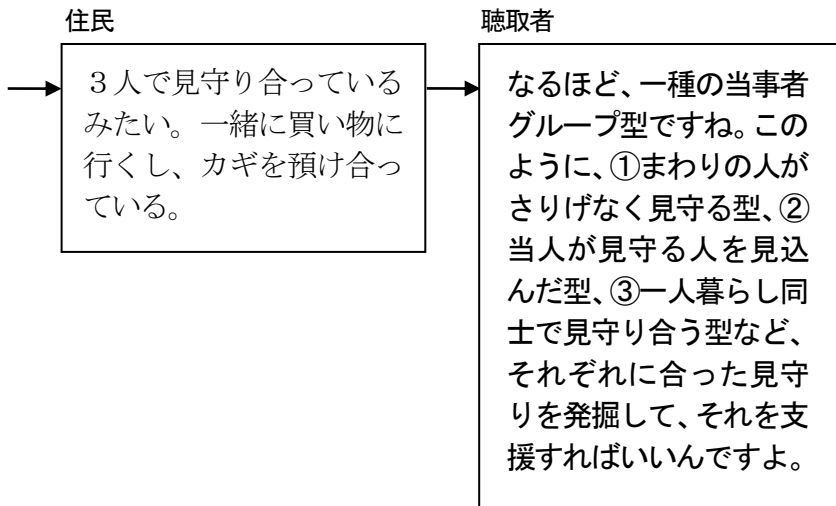
● …需要援護者・気になる人
★ …世話焼き

黒い線が、身内の関わり
赤い線が世話焼きの関わり

2. 見守り状況を個別に、ていねいに

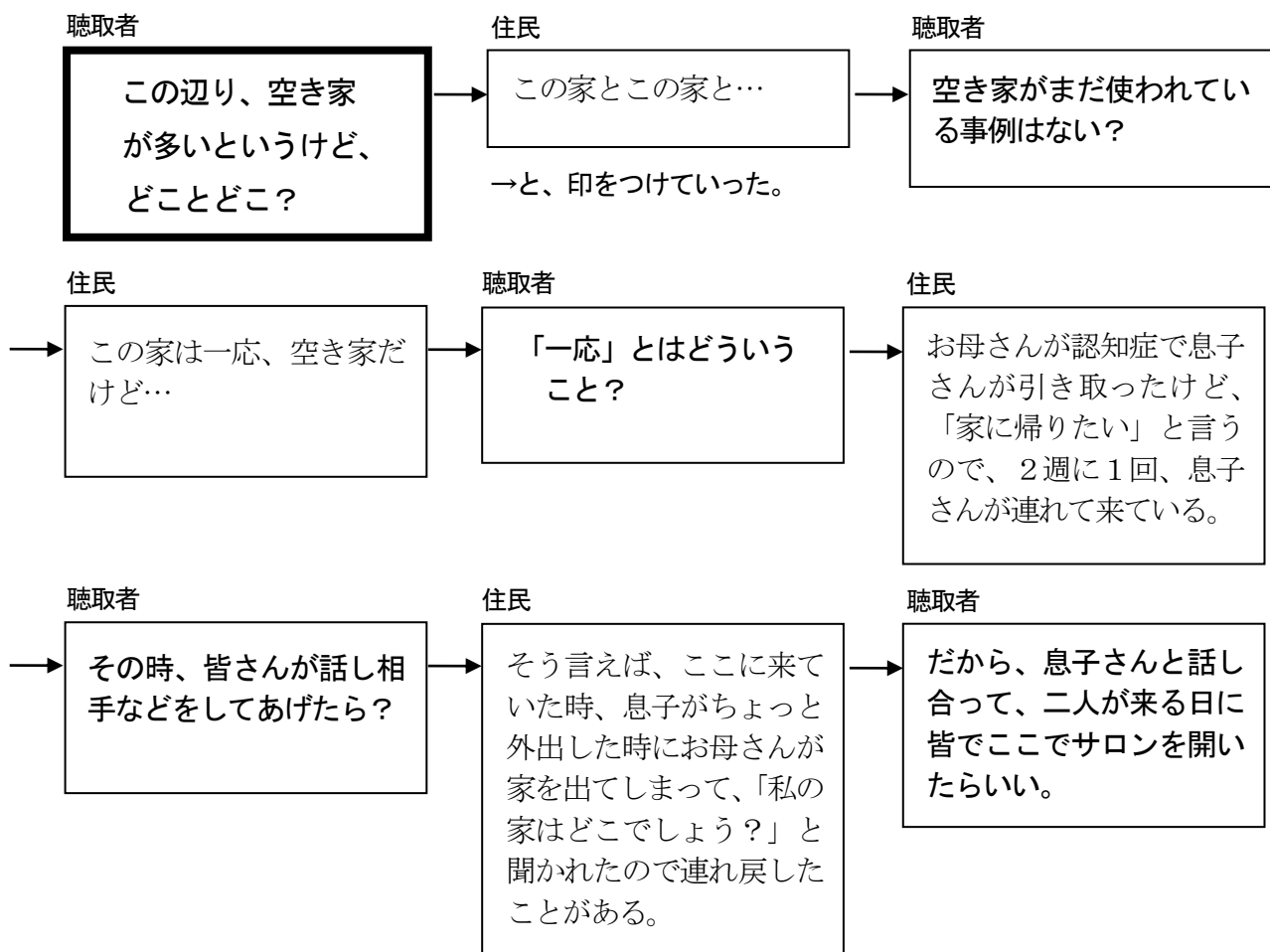
- ①これがマップづくりの入り口。とりあえず孤独死などが心配な一人暮らし高齢者の一人ひとりについて、周囲の見守り状況を点検していく。
- ②ただ見守りの線を引くだけでなく、それぞれの見守りの特徴を把握していく。それをパターン化すると、見守りの一般的なあり方が見えてくる。
- ③そのためには、対象者一人ひとりについて、ていねいにその実情を聞き出していかねばならない。「この家はこの人が見守っている」「ああそうですか」ではダメだ。
- ④見守りの実態がわかったら、今度は異変の伝達ルートや連携のあり方を考えていく。
- ⑤そのご近所特有の見守りの実態も見えてくる。巨大世話焼きと彼女が作ったネットワークが発見できた。一戸建てと異なり、住民がひとまとまりになりやすい団地らしい事例だ。





3. 不審な点、気になる点を詰めていく

- ①住民からの返答を聞いていて、「おや？」と思うことがあればそこをきちんと問い詰めていくことが大切。
- ②「空き家は？」の問いに「一応は」の返事。「一応、とはどういうことこと？」と聞いていったら、認知症の母を引き取った息子が2週に1回、ここに戻っているという事実が判明した。
- ③一人暮らし高齢者が数軒、固まっているご近所一彼等なりに助け合っているのではないかと聞いていったら、その通りだった。
- ④趣味グループがいっぱいあるというが、では要介護の人を仲間に入れているのかと聞いたら、そうではなかった。そこから趣味グループがご近所で助け合うことの大切さが見えてきた。
- ⑤「息子と母親」のペアのケースを聞いたら、母親が息子宅に通って来ているという変則型が見つかった。そこで「なぜ？」と突っ込んでいったら、虐待ケースだった！



聴取者



施設入所した人が里帰りするのはよくあるけど、息子に引き取られた人が里帰りするのは珍しいね。こうすれば、本人もさびしくないよね。これを一般化すればいい。

聴取者

一人暮らしの方に印をつけていこう。

→印をつけ、それぞれ周辺の誰が見守っているか、線を引いていった。

聴取者



このあたり、6人もかたまって（一人暮らしが）いるけど、お互いに見守り合っているんじゃない？

住民（一人暮らし高齢者の1人、Aさん）



私がこの人とこの人を見守り、この人がこの人を、この人がこの人を…

→と線を引いていったら…

聴取者

Aさんがまとめ役をしているんだね。つまり、キーマンだ。

聴取者

趣味つながりが多いけど、どんな趣味グループがあるの？

住民



花フラワー、民舞、踊り、カラオケ…

→など、いろいろなグループが出された。

聴取者

そうすると、趣味グループに一人暮らしの人が参加していれば、見守りにもなるね。

聴取者

ところで、これらの趣味グループに要援護者は受け入れられていないの？

住民



そういうことはやっていない。この人はメンバーだったけど、最近認知症になってやめちゃった。

聴取者

なんだ、要援護状態になっても趣味活動ができるようにするのを地域福祉って言うんだけどなあ…メンバーが各自ご近所に戻ってから助け合えればいいんだけどなあ。

聴取者

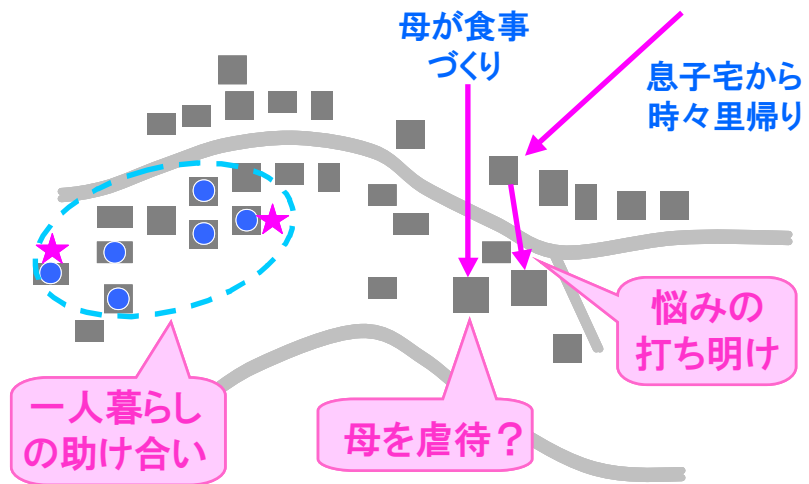
そういえば趣味グループには、地区ごとに連絡員を置いて、活動の情報提供などをしている。この人がこの辺りの連絡員。

→と、Bさん宅を指す。

聴取者

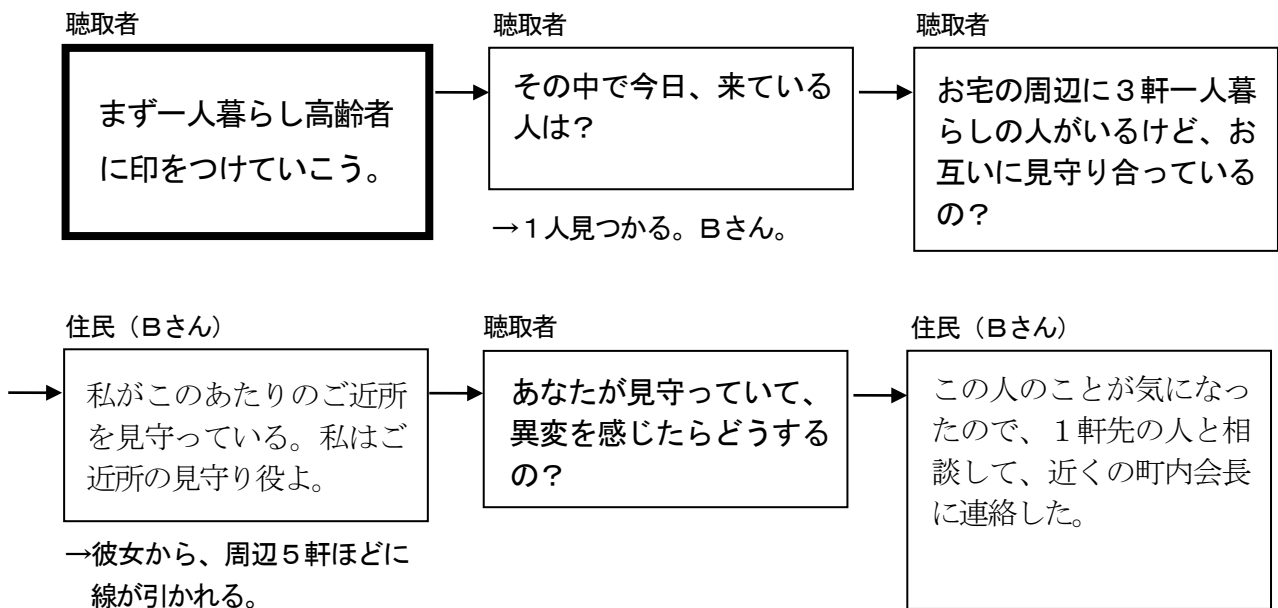


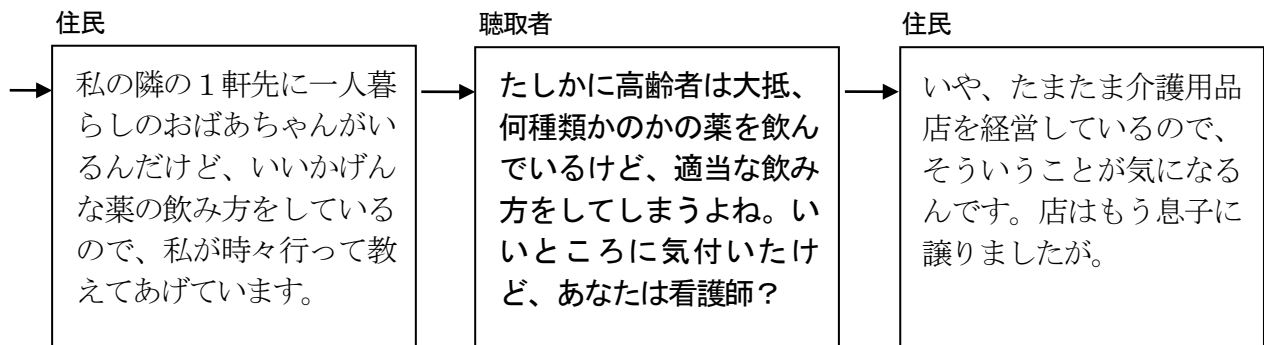
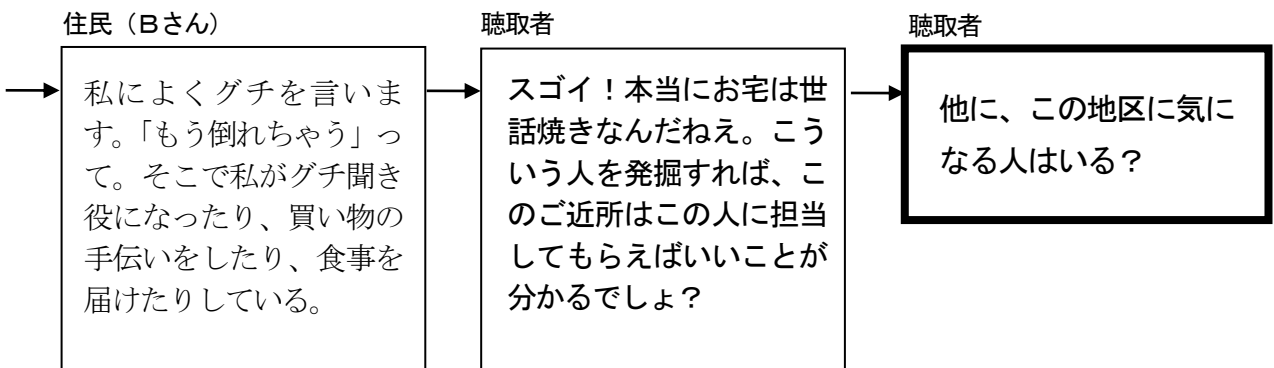
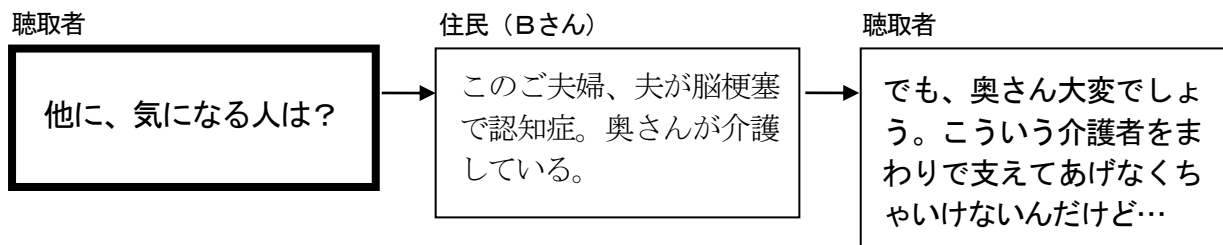
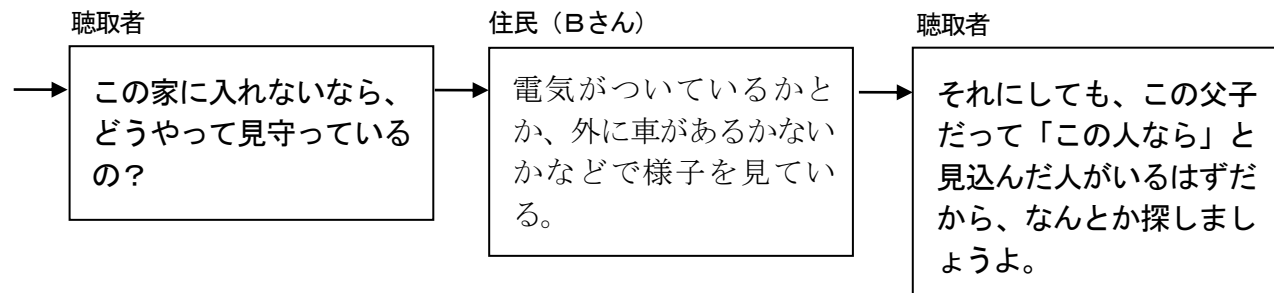
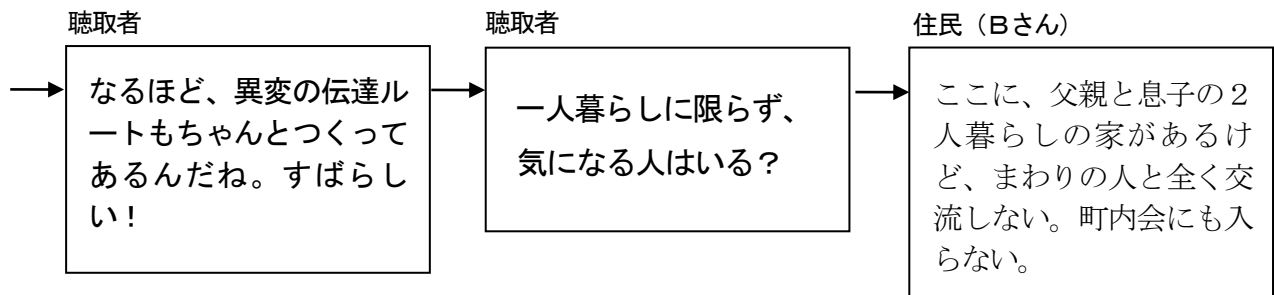
ほら、その連絡員を中心にご近所に戻ってから助け合うようにすれば、認知症の人だって、そのご近所の人で連れて来ればいいじゃない。

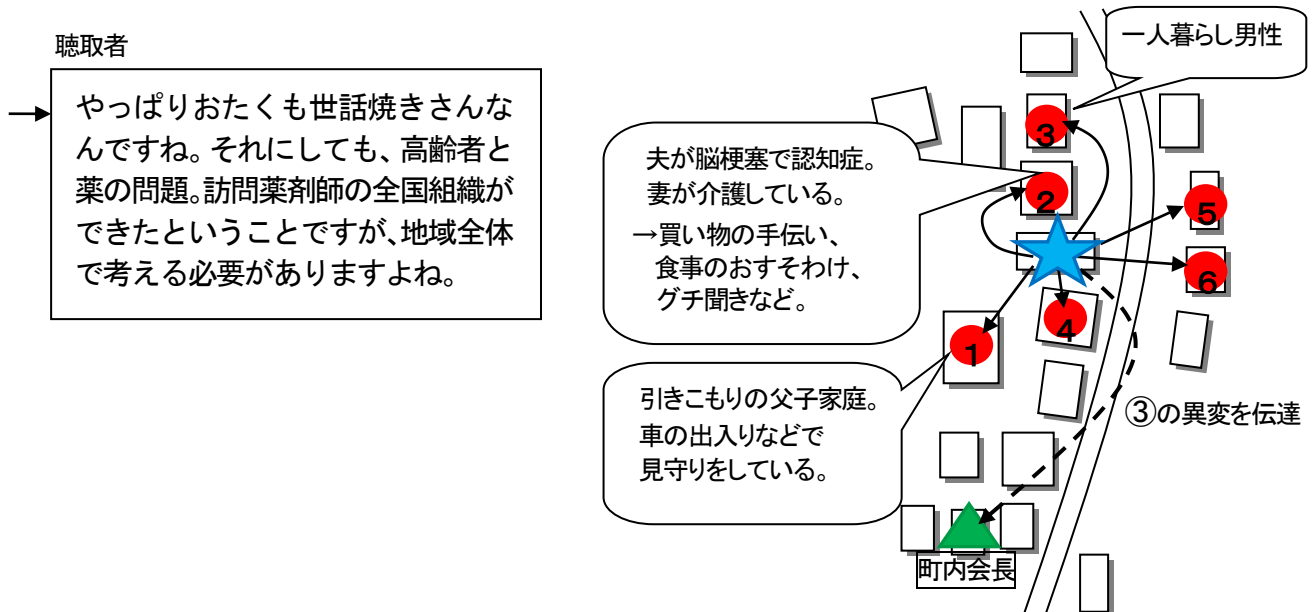


4. 世話焼きから見事な活動を引き出す

- ① 1人の世話焼きさんをつかまえて、根掘り葉掘り聞いていくと、様々な活動をまとめて引き出すことができる。
- ② そのためには、こちらがいろいろ「話のタネ」をぶつけていかねばならない。「こういう場合はどうするの?」と。
- ③ 「こういうケースには、こういう対応が必要 (あり得る)」と言ってみると、「それなら私はこうしている」と具体的な対応例を引き出すことができる。

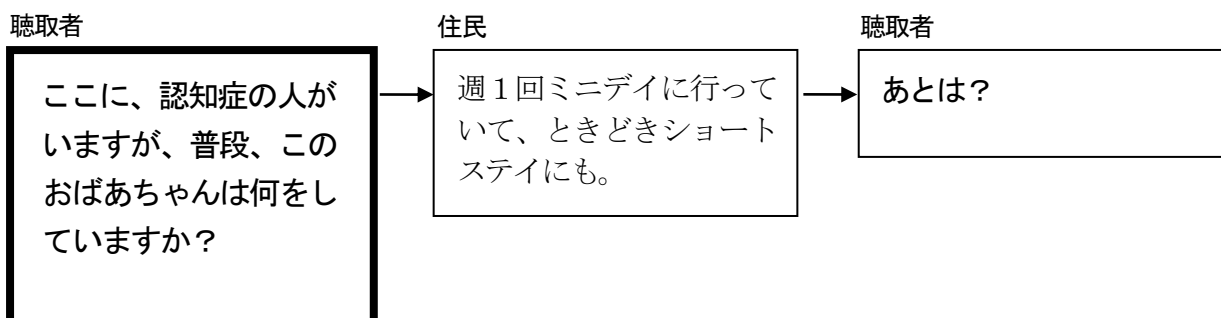


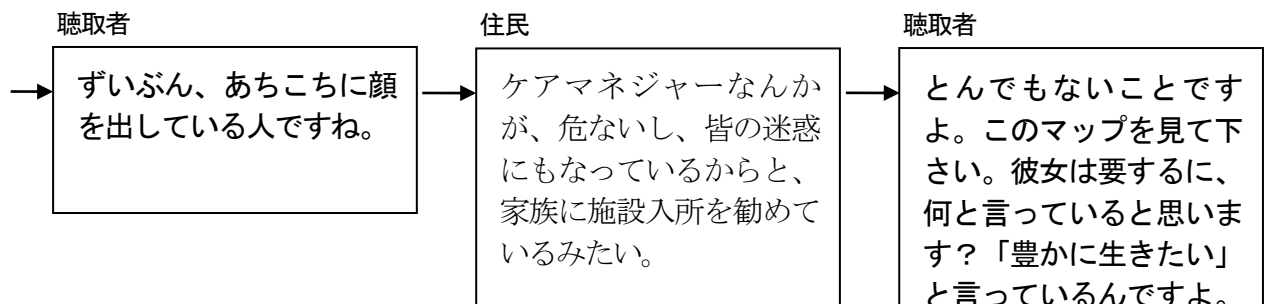
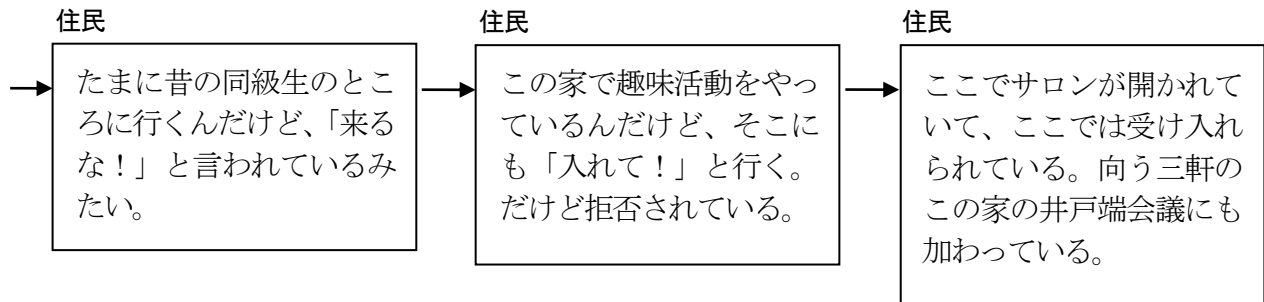
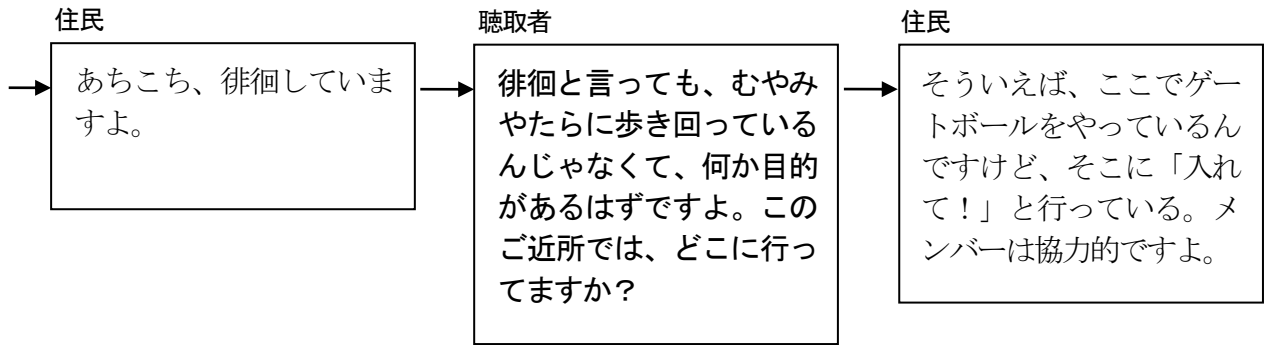




5. 当事者の動きを追っていったら

- ①「認知症の人が地域をあちこち徘徊している」と聞いたら、「ああ、そうですか」と納得してしまうのではなく、本人の立場に立ち、「徘徊にもそれなりの目的があるはずだ」と本人の地域での動きを徹底的に聞いていったら、意外なことがわかってきた。
- ②そうした別の「視点」を住民に提供したら、このようにたくさんの事実が現れてきた。それらを整理すると、要するに本人は地域で何をしたいのかが分かる。それは、「地域で豊かに生きたい」ということ。そのために住民がそのグループに要援護者を仲間に迎え入れればいいこと、そして、本人の行動全体がその人にとっての「デイサービス利用」なのだということ—こうした住民の流儀を参加者に示してあげることが、福祉教育になる。



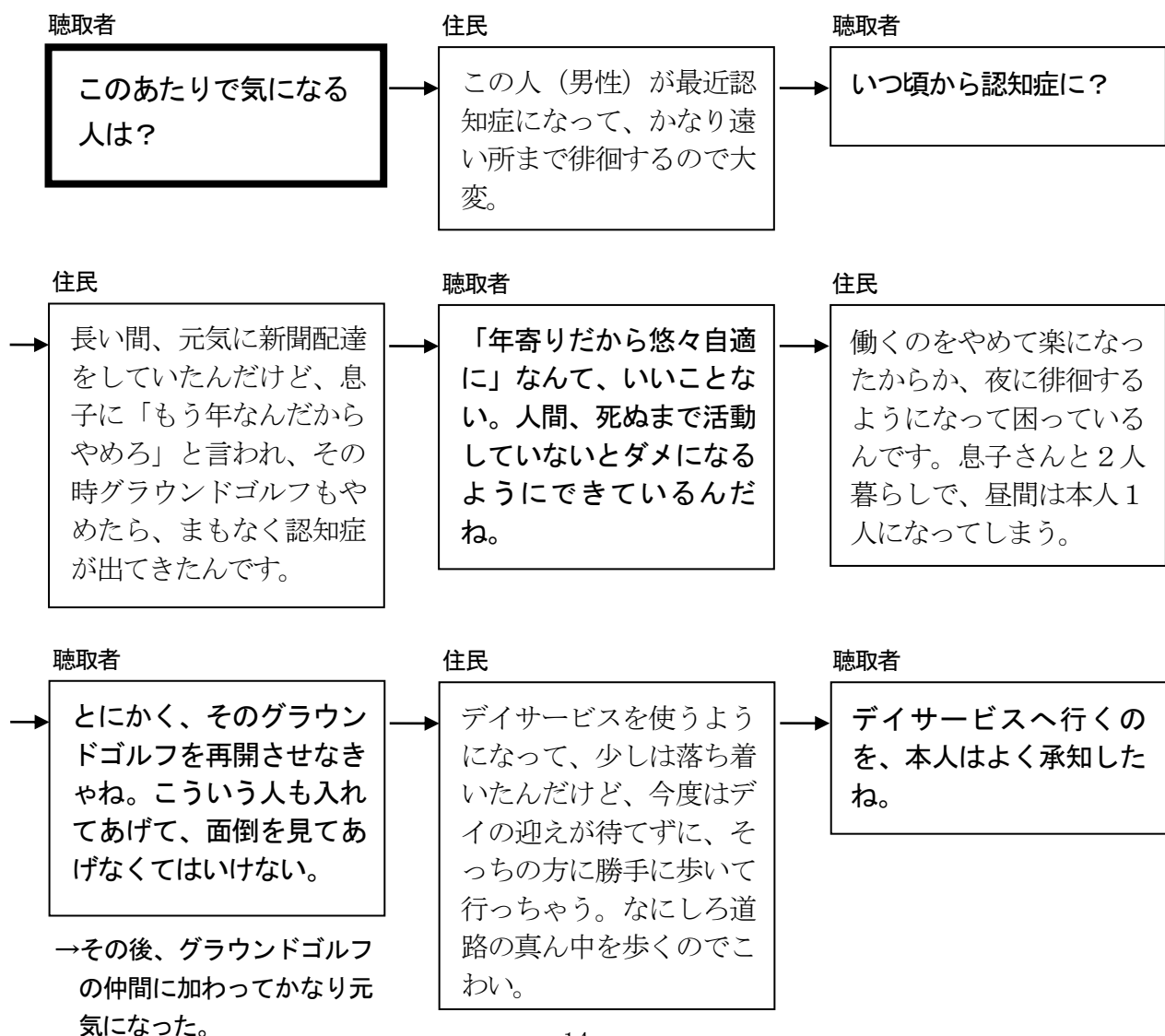


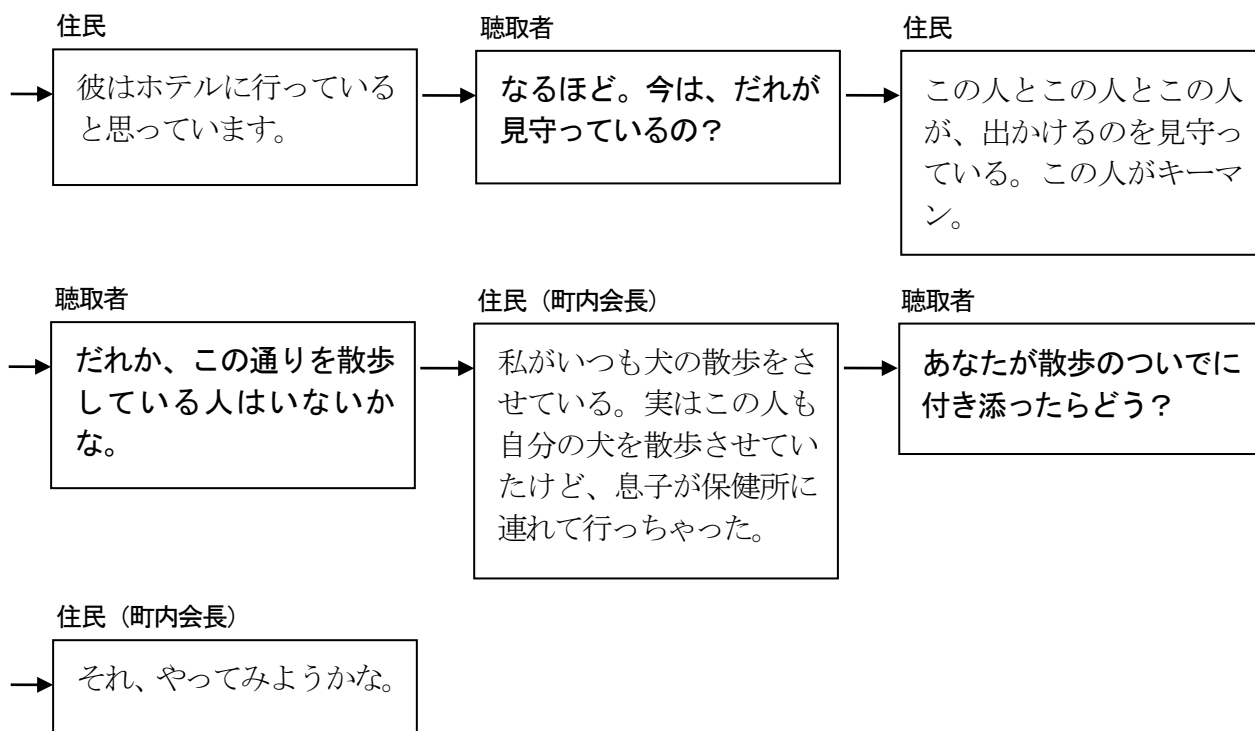
聴取者 → おもしろいことに気が付きました。彼女が出かけて行く先が5ヶ所ありますね。もしこれらが全部彼女を受け入れれば、この全体が彼女にとってのデイサービスセンターだと考えられませんか。



6. マップ作りの場で対策のアドバイスも

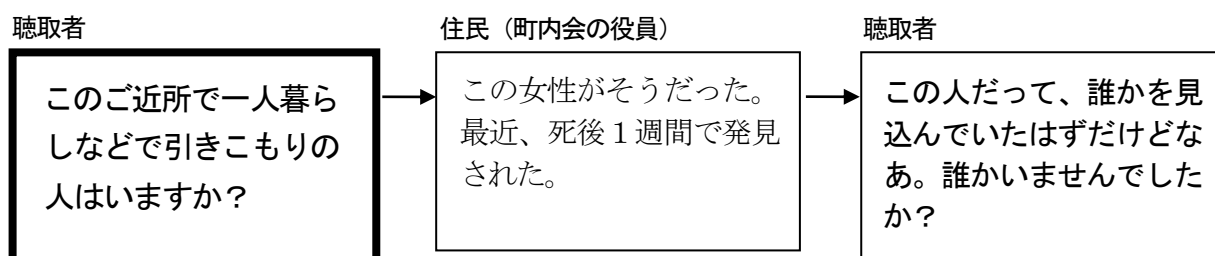
- ①マップづくりは、ただそのご近所の事実を聴取するだけではない。そこから出てきた問題に対して、どういう行動をとったらいいかのアドバイスをすることも大切だ。
- ②今回のマップづくりでは、仕事とグラウンドゴルフをやめた途端に認知症になったと聞いて、「それではグラウンドゴルフを再開させてみたら？」と勧めたら、その後、マップづくりの参加者（町内会役員）がその通りに実行して、「元気になった」という報告を受けた。
- ③さらに、デイサービスの迎えが来るのを待てずに歩き出してしまうと聞いて、町内会長がその通りを毎日、犬の散歩をさせているというので、「ならば、そのついでに寄り添ってあげたら？」と言ったら、それも実行した。
- ④このように、実行力のある住民が参加すると、マップづくりで出てきた課題が次々と解決していくこともある。

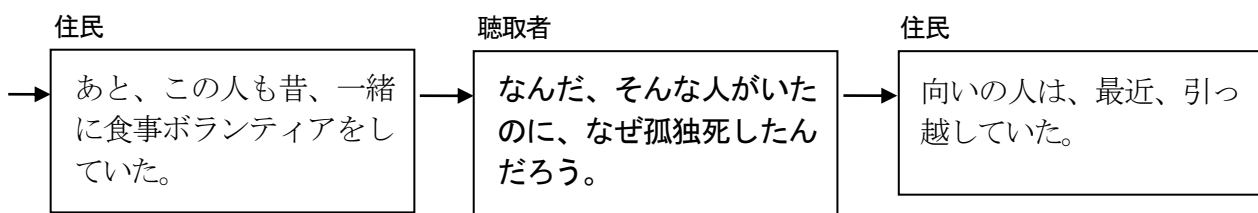
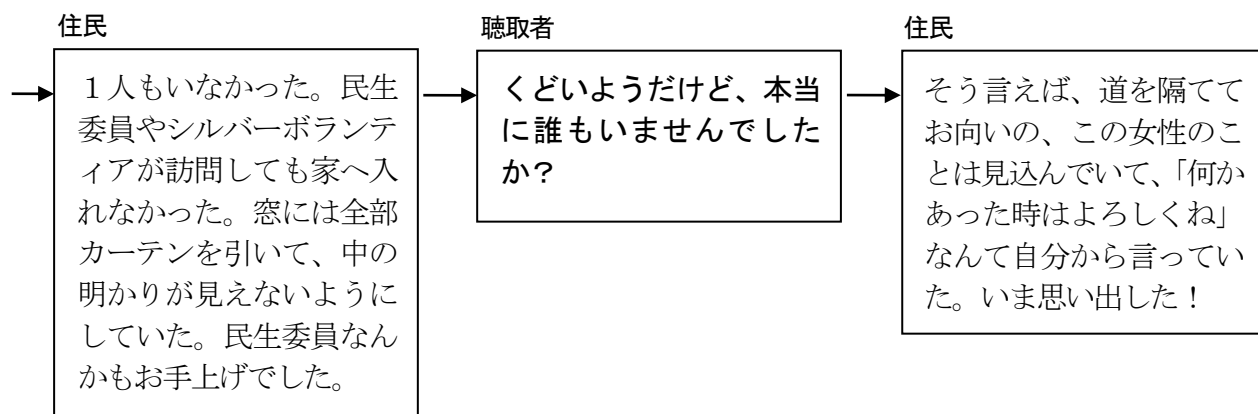




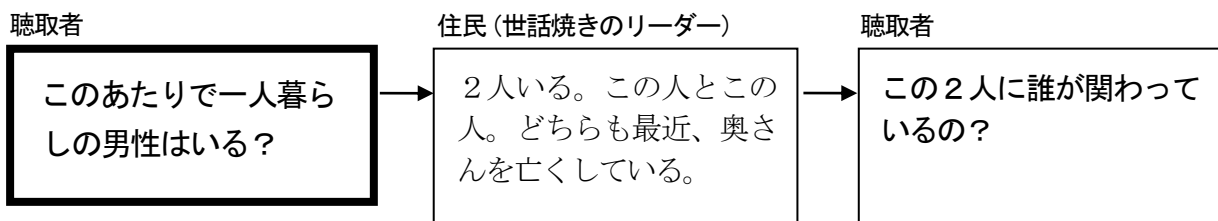
7. 引きこもりの接触相手を探すには

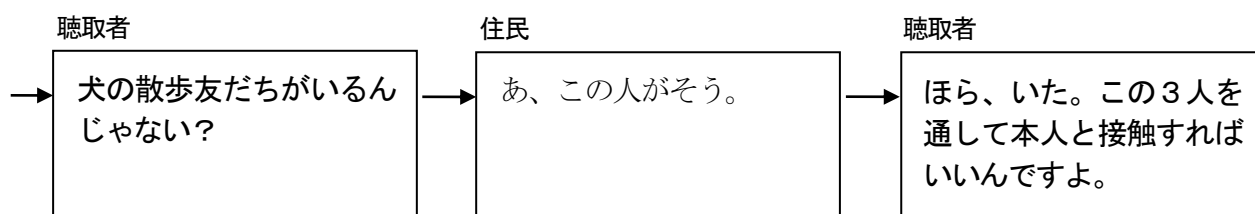
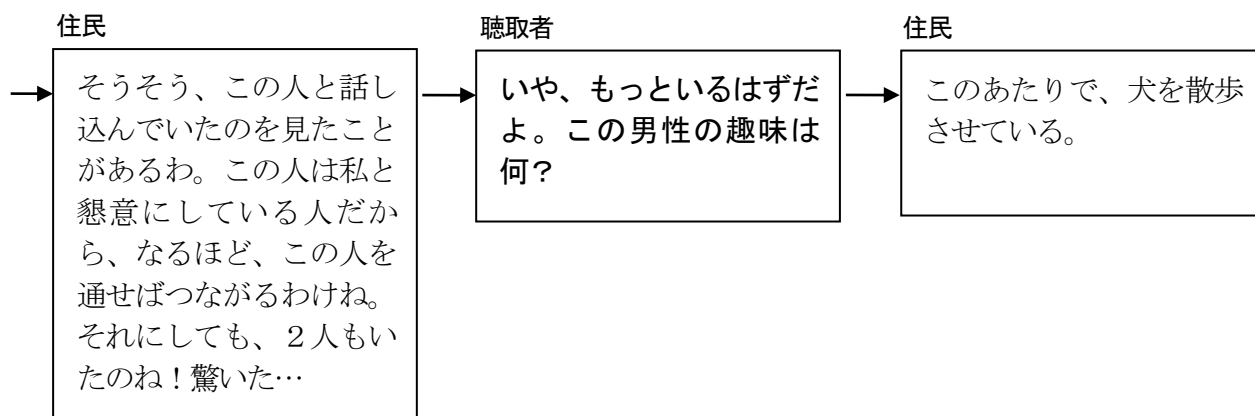
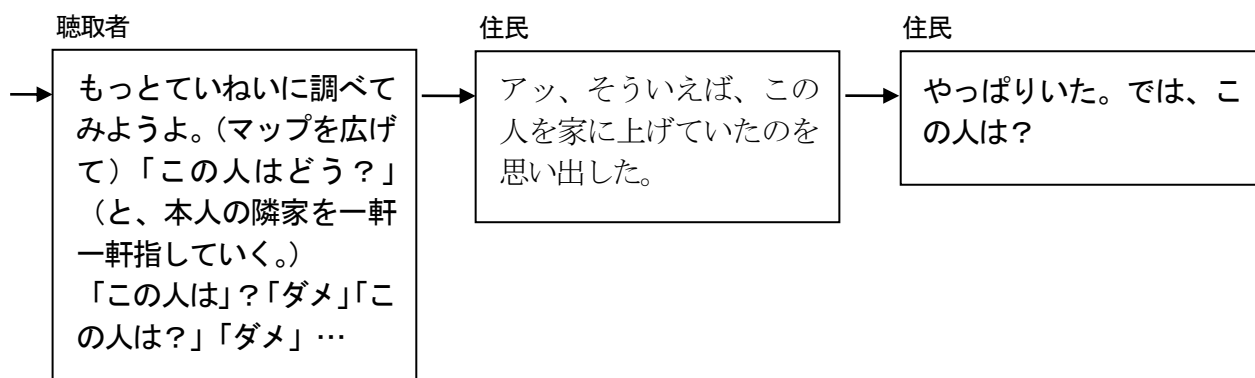
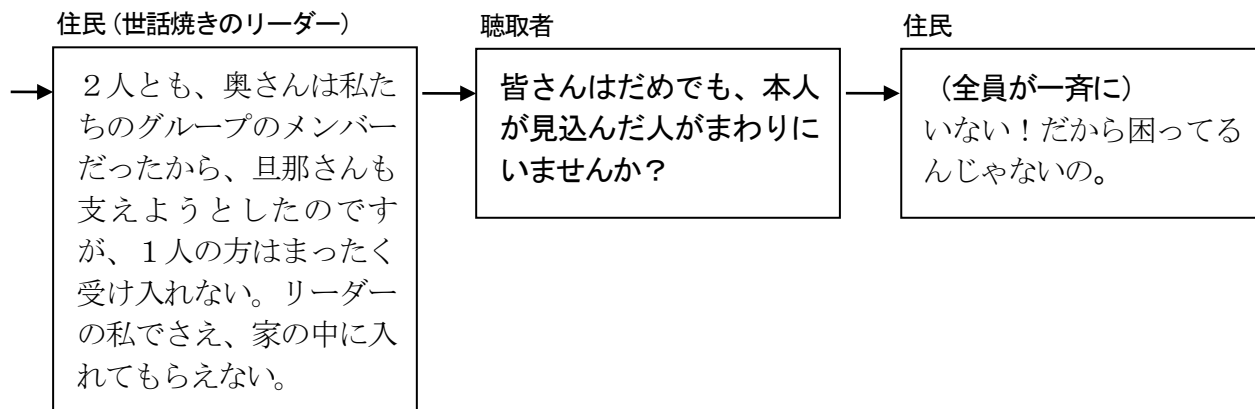
- ① 「この人は引きこもりだから、誰とも交流がない」と住民が答えた時、簡単に納得してしまっっては、大事な真実に到達することはできない。「そんなはずはない。誰だって命は惜しいはずだから、1人や2人の相手はあるんじゃないの？」と、ねばらなければならない。極端な時は、30分もねばる。すると、突如、思い出すことも多い。
- ② それでも思い出せない時は、住宅地図に載っている家を一軒一軒、指差していく。すると、本人宅とその家の距離や位置を見ていて、思い出すこともある。
- ③ 交流のある人がわかったら、その限られた接点をどのように生かしたらいいのか、孤独死を防ぐにはどうしたらいいのか—のアドバイスをする。

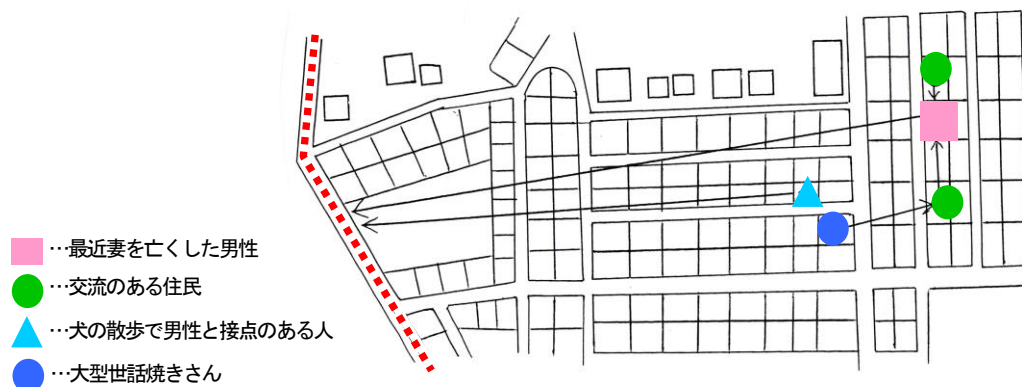




聴取者 → 民生委員は自分に相談すべきだと思っていたかもしれないけど、本人には相談相手を選ぶ権利がある。それを尊重するなら、向いの人に一言言っていたかもしれない。「あなたは見込まれているようなので、何かあったら知らせて下さいね」と。そうすれば、引っ越す前に一言連絡してきたかもしれませんね。

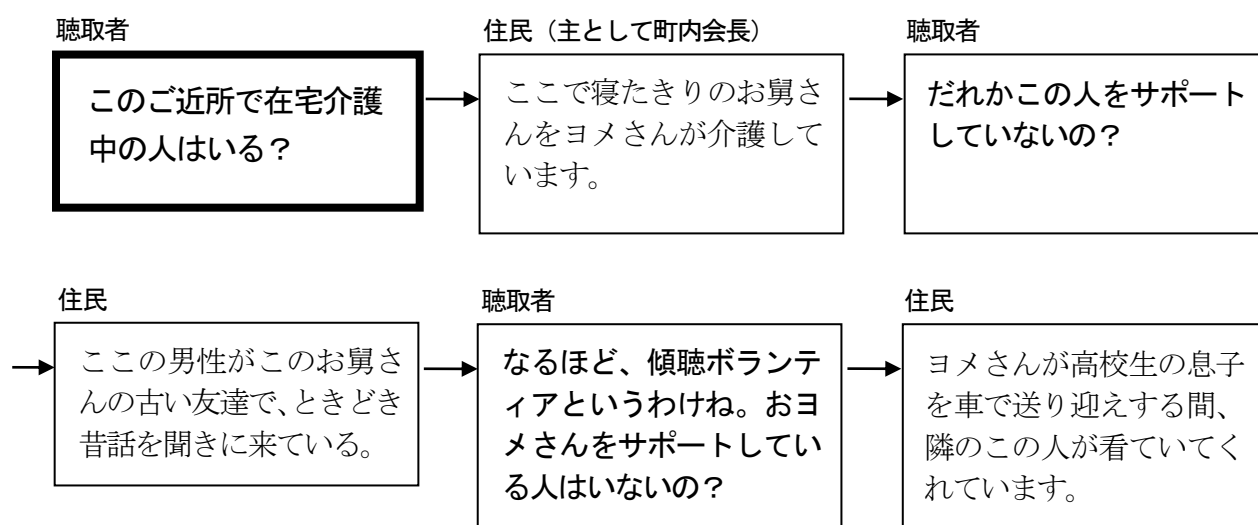


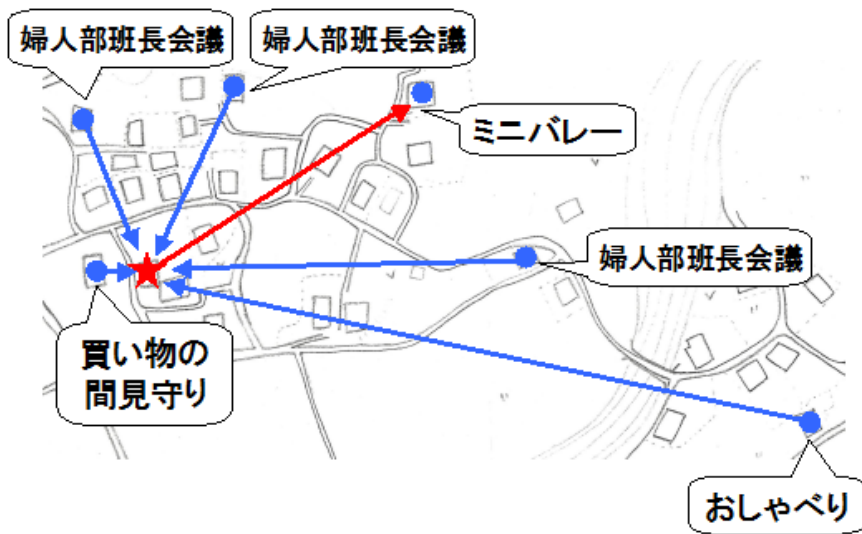
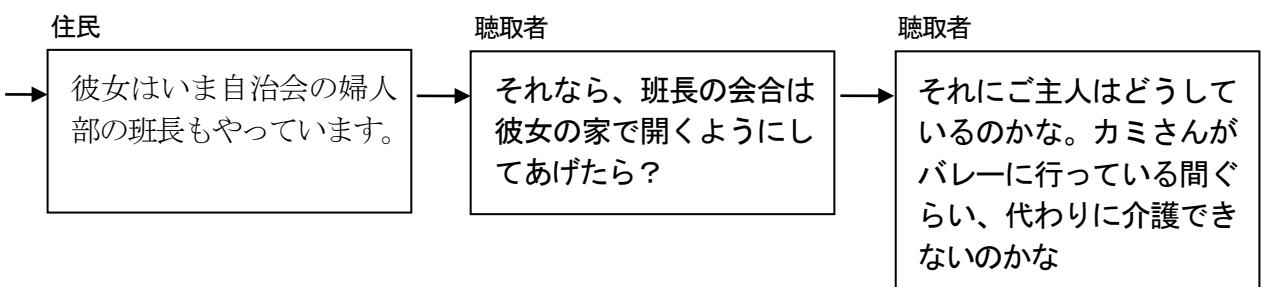
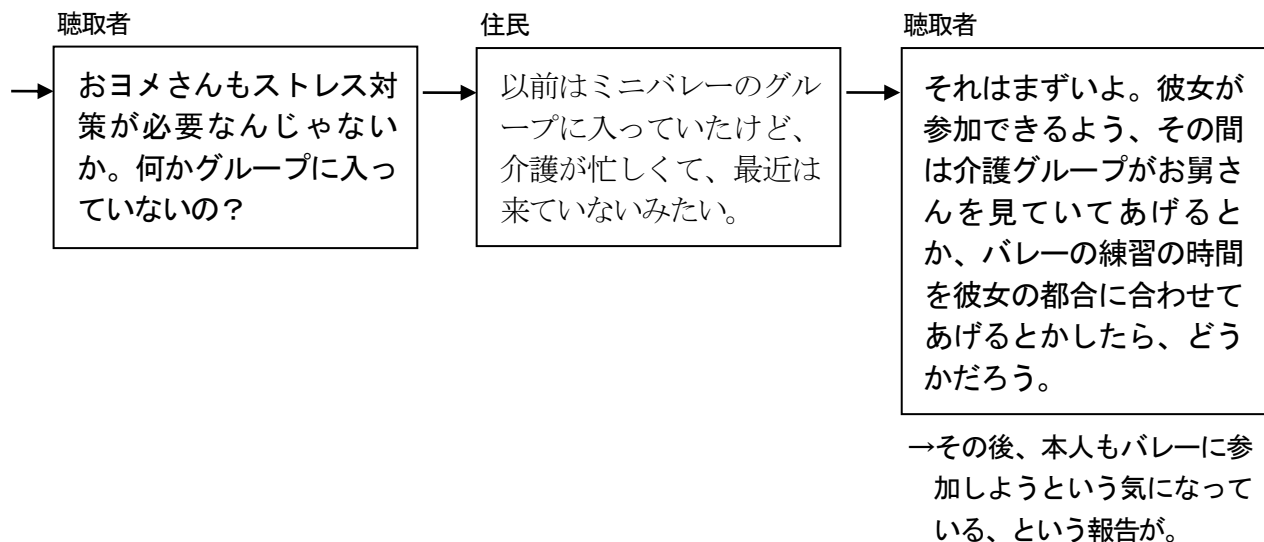




8. 在宅介護のケースでニーズを先取り

- ①在宅介護をしている家が見つかったら、まず何よりもご近所からどのようなサポートが入っているかを聞かねばならない。
- ②といっても、そういう実践例はあまり出てこないはずだ。となると、こちらで先取りした質問をしていかねばならない。「ストレス対策が必要だから、地域のスポーツや趣味グループに入っていないの?」とか。すると、不完全ながら、それに類した実践が出てくるから、あとはそれをどのように発展させたらいいか—そのアドバイスをすればいい。何もしていないというわけではないのだ。



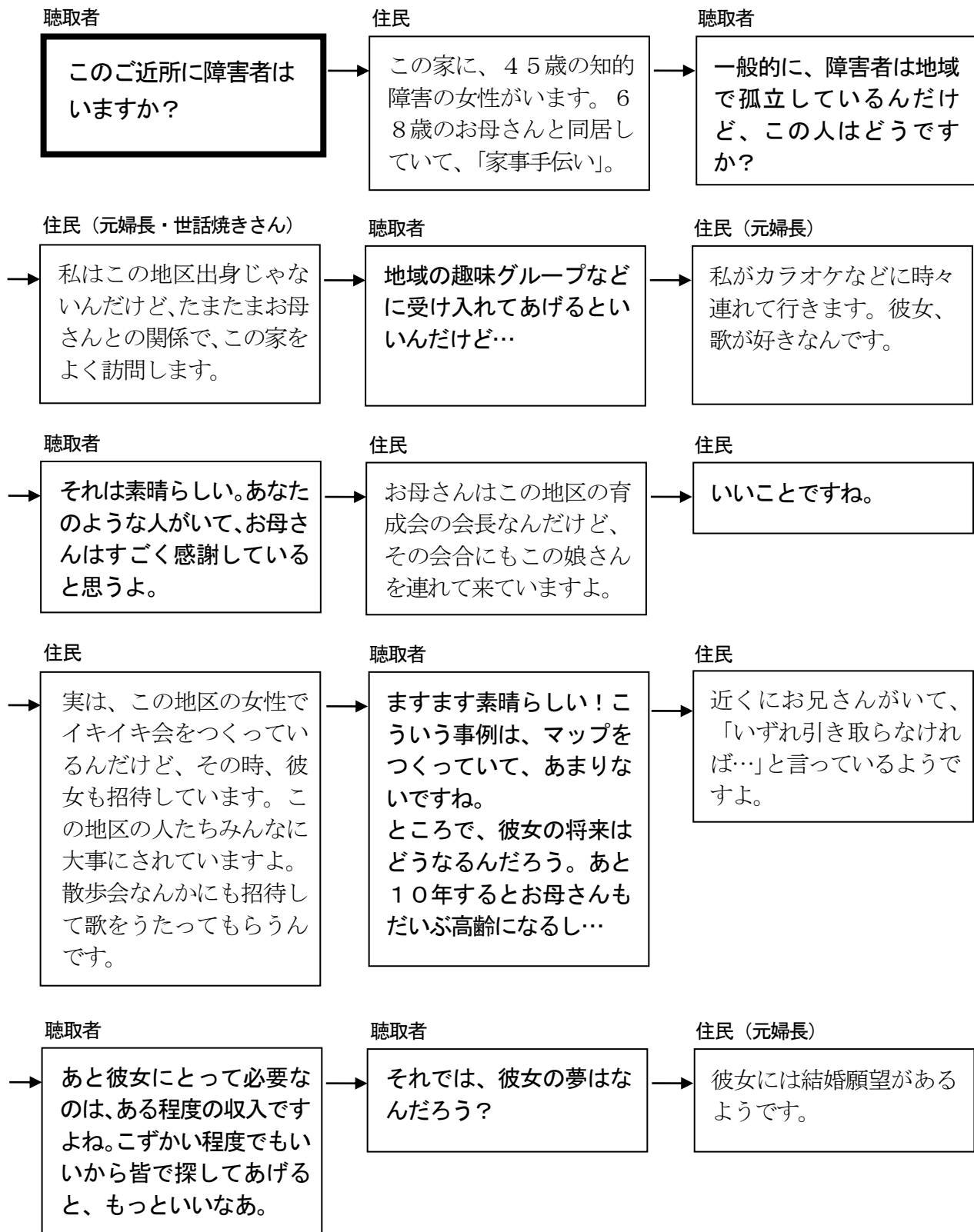


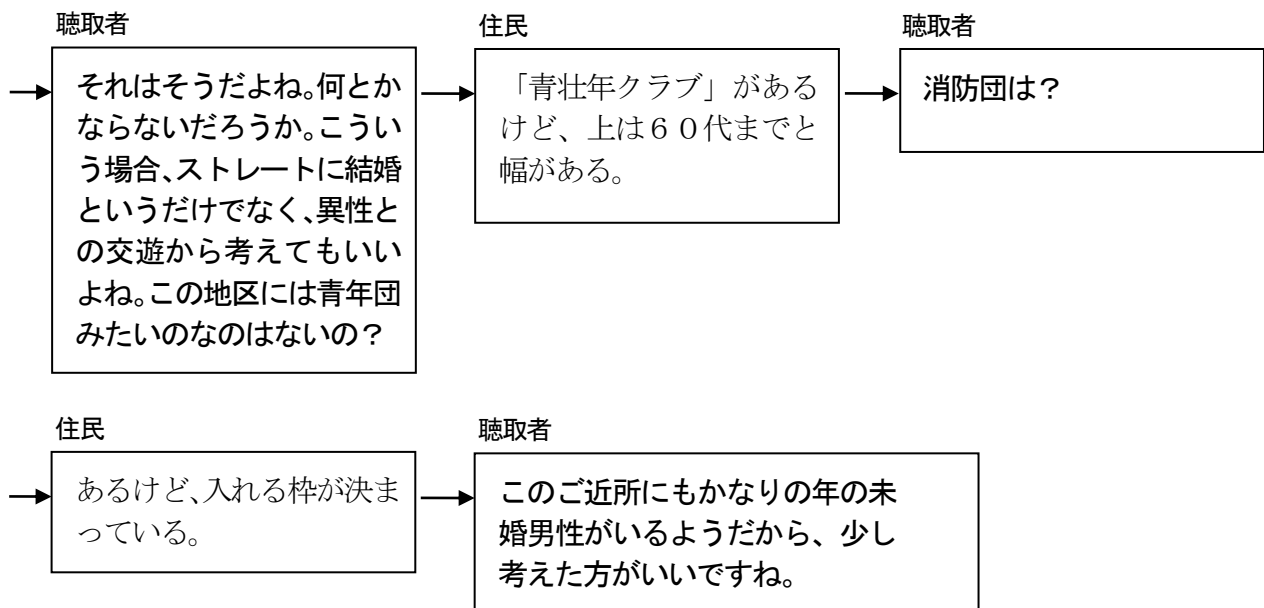
9. 大人の障害者のケースも先取り質問

- ①在宅介護のケースと同様に、大人の障害者の場合も、とりたてて注目に値する実践は引き出せない。「ただ自宅に引きこもっている」という事例が圧倒的に多いのだ。
- ②そうすると、やはりニーズを先取りした質問が必要になる。「もしかして、誰かが訪問し

ていないか」「誰かが友達になっていないか」「どこかのグループが仲間に入れていないか」など。そうしたら、このようになかなかいい事例を引き出すことができた。

③このように「いい回答」を引き出せるかどうかは、こちらがそれが可能になる方策で、しかも具体的な実践例を示せるかどうかにかかっているのだ。

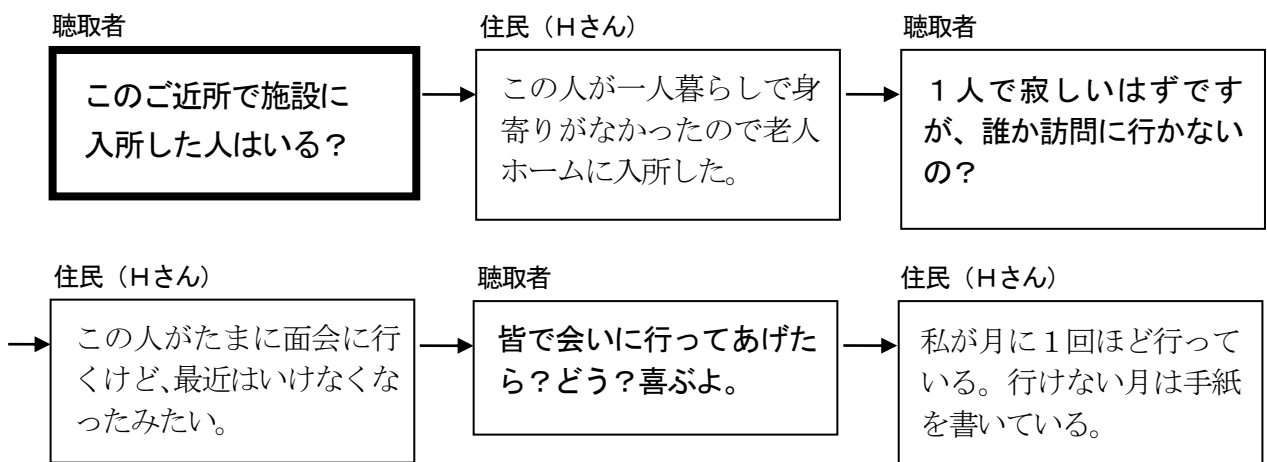




10. 呼び水を与えれば、予期せぬ答えが

①繰り返し述べているように、こちらが具体的な（先取り）質問をぶつけてみると、こちらが期待していた以上の豊かな回答が返ってくる場合が多い。そのためには、まず呼び水となる質問をぶつけねばならない。

②この事例でも、施設入所者のケースで、「誰かが訪問していないの？」と聞いたら、それを実行している人がいた。視力障害者のご近所にいると聞いて、「だれかその人のニーズに答えていないか？」と聞いたら、そこでも…



聴取者

→ なんだ、やっているじゃない。すごい世話焼きだね、あなた。

聴取者

→ その他にこのご近所で気になる人は？

住民

この家が、ご夫婦ともに目が不自由。

聴取者

→ それは大変だね。いろいろ困ったことがあると思うよ。ご近所としてどうやって支えているの？

住民

→ 花見の時は料理の中身を教えたり、必要な介助をしたり…

聴取者

→ 一度、視力障害者の生活状況と支援のあり方を勉強し合うといいかもしれないね。

住民

→ そういえば、隣の空き地の大きな木の枝が屋根にぶつかってうるさい、と私の所に言ってきた。

聴取者

→ それぞれ、そういうことが分かったら、すぐやってあげなくちゃ！

聴取者

→ このご近所は要援護者が多いけど、班長が回ってきたらパスするの？

住民

→ いや、班長になって、配布物の手伝いなんかしてもらっている。

→ マップづくりの後、彼女は早速、空き地の持ち主を探した。その身内に接触し、「いいんじゃないの」と言われたという。すぐに動いたところが、いかにも世話焼きらしい。

聴取者

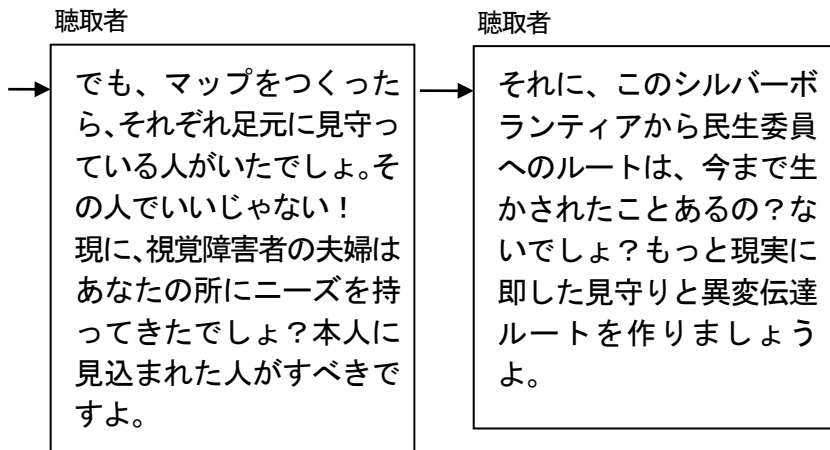
→ それはいいね。本人からしたら、パスするのも気詰りじゃないかな。ある地区で90歳の一人暮らしの女性が、「皆で手伝ってあげるから」と言われて引き受けた、と言っていた。班全員で支えての班長というのもおもしろいね。

聴取者

→ このご近所では、要援護者の見守りはどうなっているの？

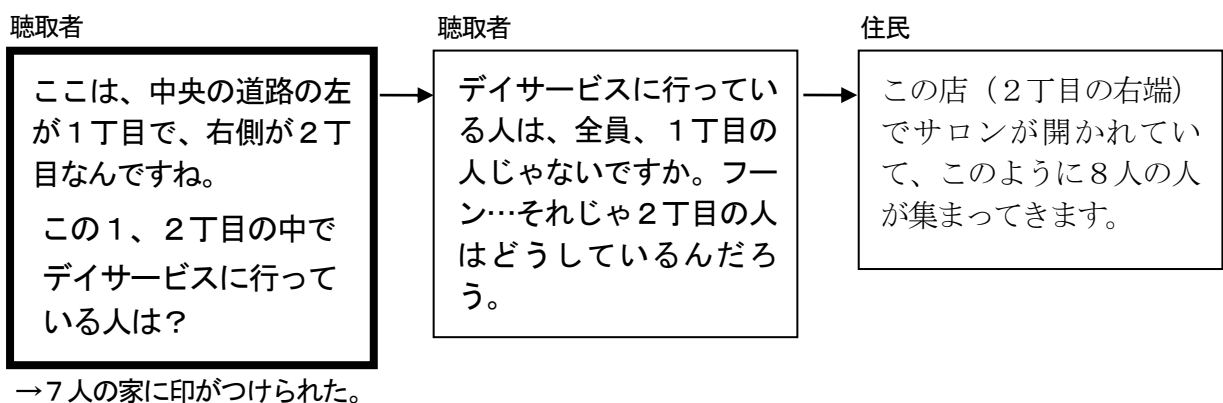
住民

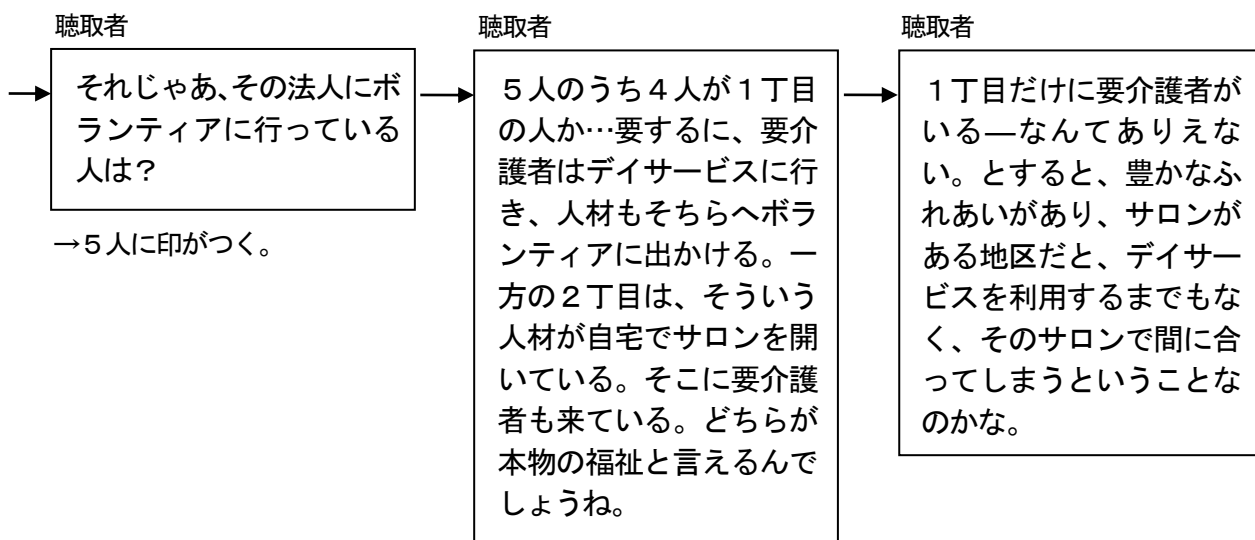
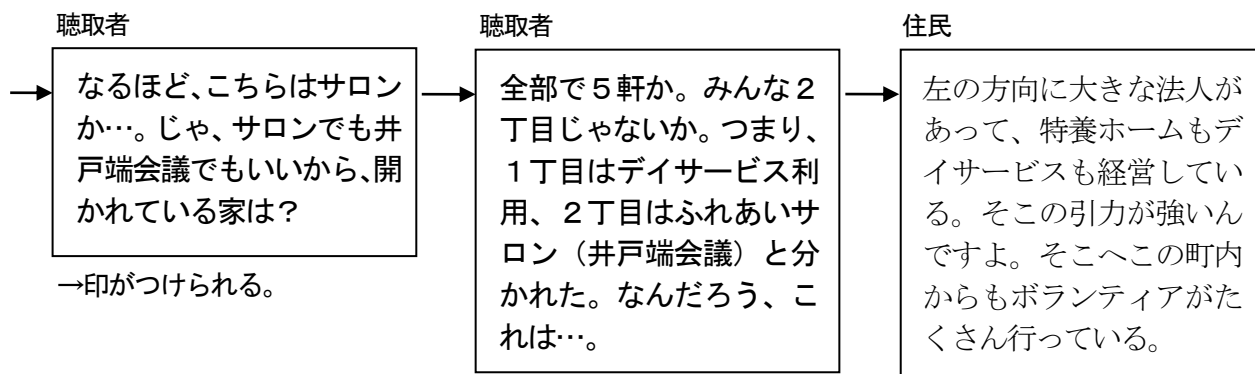
→ この家がこの地区のシルバーボランティア役。この人が見守ることになっていて、異変があったらご近所外のこの民生委員に連絡することになっている。



11. マップに出た奇妙な事実を見逃すな

- ①マップづくりをする時、聴取する側は、常に「疑問」を持って臨まねばならない。ちょっと「おかしい」事実気付いたら、今すすめているテーマを脇に置いて、その疑問をぶつけていくのだ。
- ②隣り合った町内なのに、1丁目の方にはばかりデイサービス利用者がいる。そのことについて聞いていったら、2丁目にはふれあいサロン（というか井戸端会議）があちこちで開かれていた。一方はデイサービス利用、もう一方あは井戸端会議—このナゾを解くカギは何か？
- ③そのナゾ解きをするのが、聴取する側の役割である。そこに今の福祉のあり方の問題点がひそんでいる場合もある。そこにまでマップづくりは突き進んでいかねばならない。



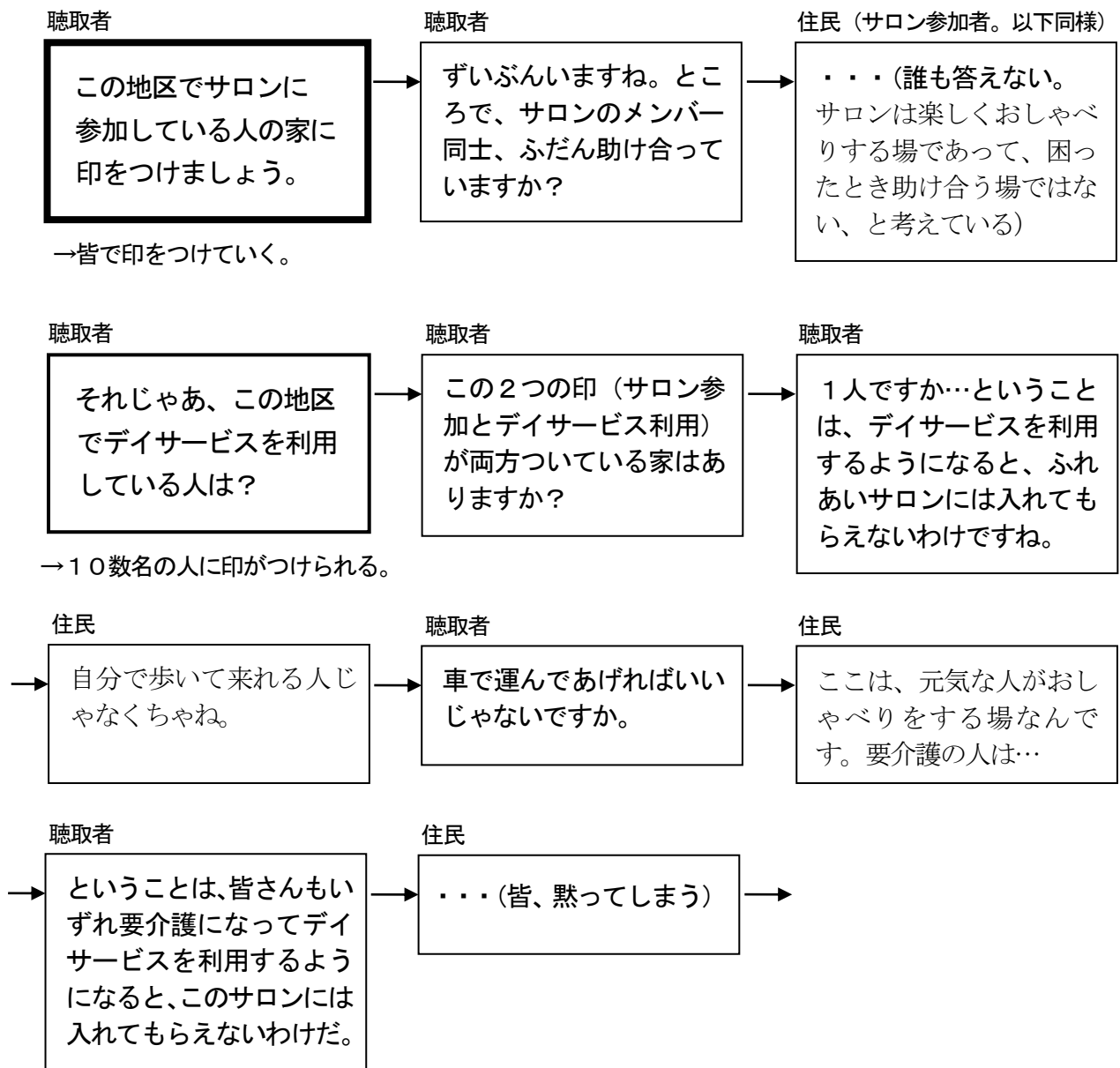


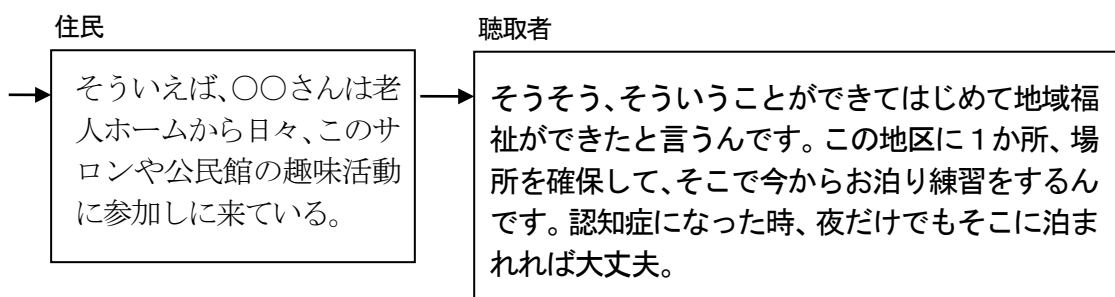
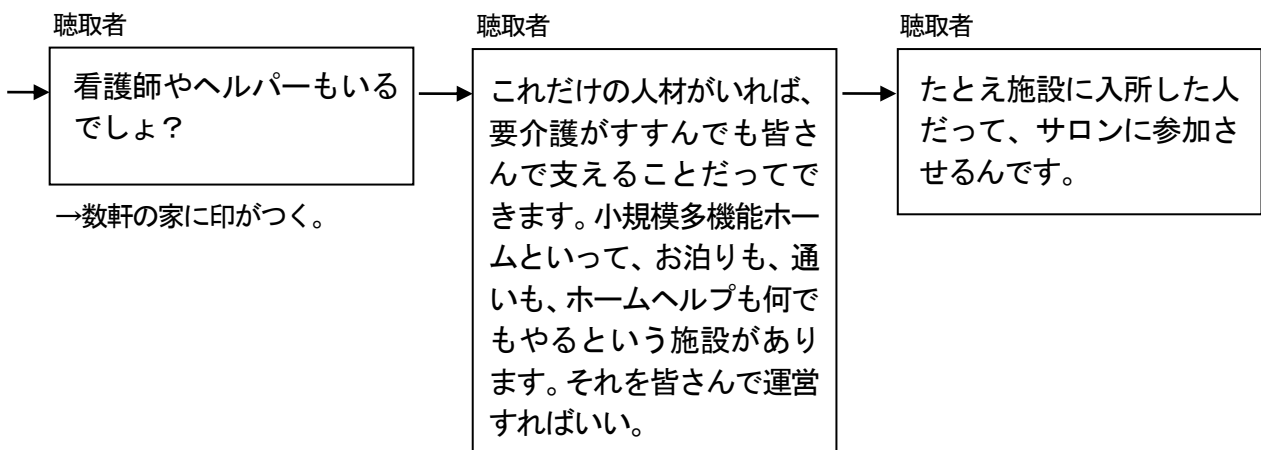
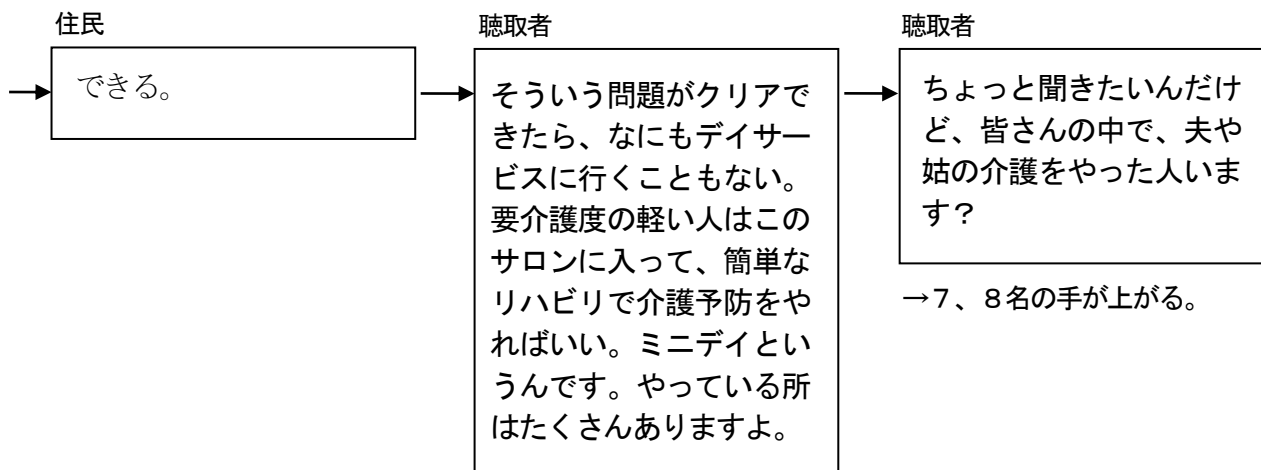
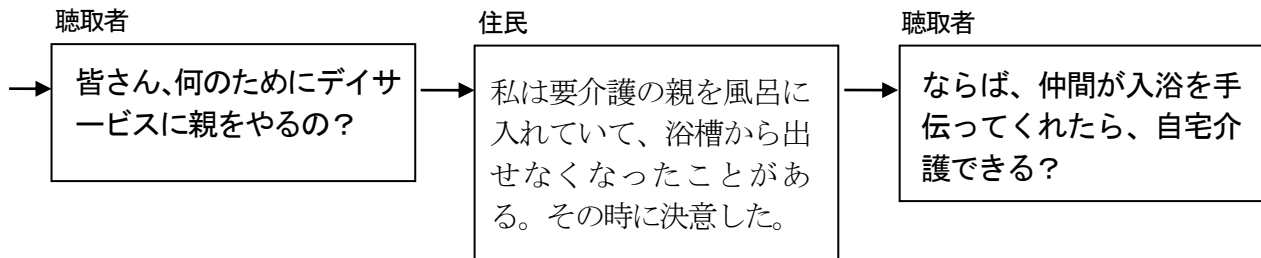
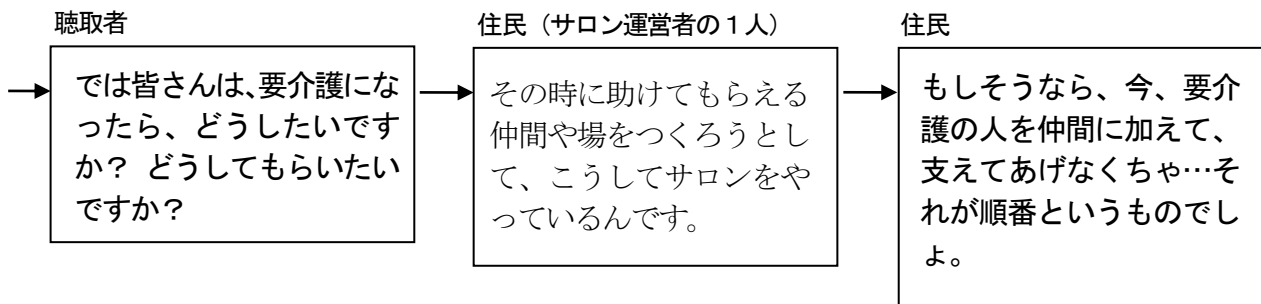
12. サロンボラの要求水準を上げさせる

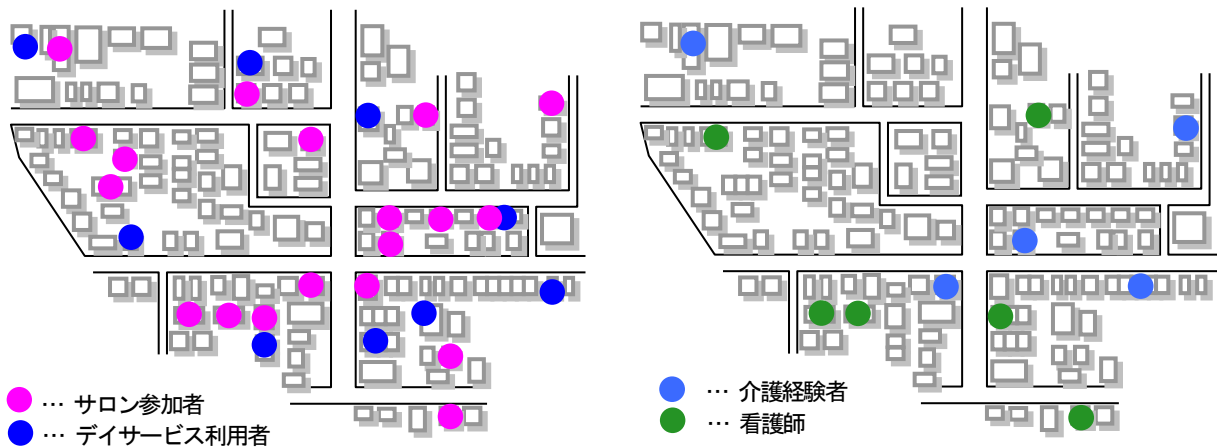
①ふれあいサロンが盛んだが、大方は、元気な人が寄り集まってのおしゃべりの会。そこで

は要介護者などは受け入れていない。これで本当にいいのか、考えさせていく。

- ②「これでは、自分が要介護になった時に参加させてもらえないけど、いいんですね？」
一から開始。結局、自分が将来どうなるのかを深く考えないままでサロンを開いているから、
こういう矛盾した活動になる。
- ③このとき重要なのは、ただ「要介護者もサロンの仲間に」とストレートに押ししていくので
なく、自分が要介護になったらどう生きたいのか、どうしてもらいたいのかと、そちらに
目を向けさせることから始めるといい。そして、「その時はあきらめて老人ホームに入る」
などと言うのをそのまま受け入れるのではなく、「そうなっても自宅で生きたい」と要求
水準を上げさせなければならない。その上で「要介護者もサロンの仲間に」と言えば、聞く
耳を持つようになるのだ。

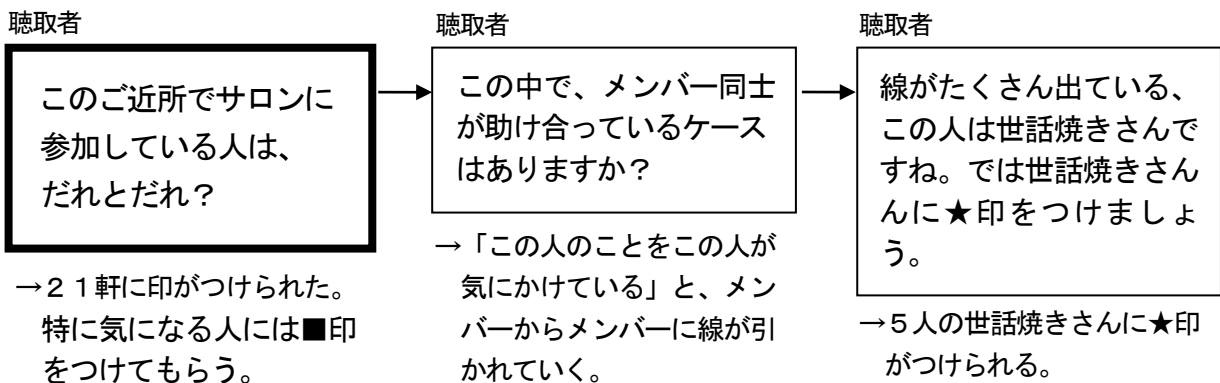


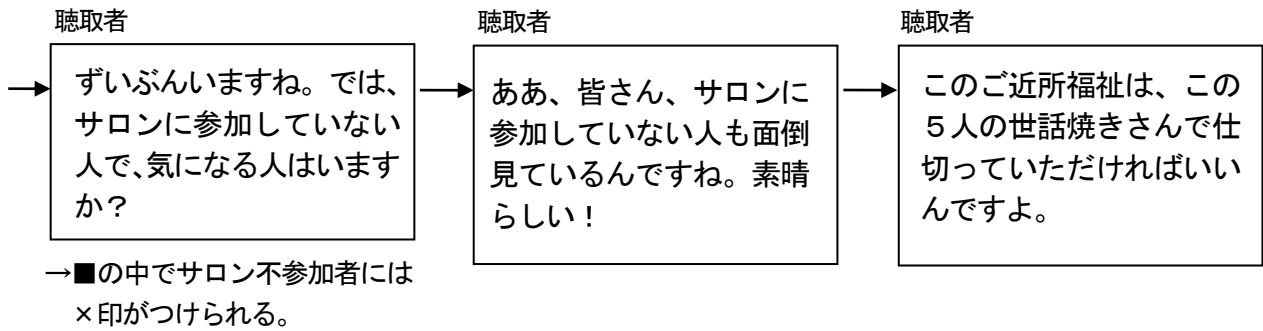




13. サロン仲間で助け合っているか？

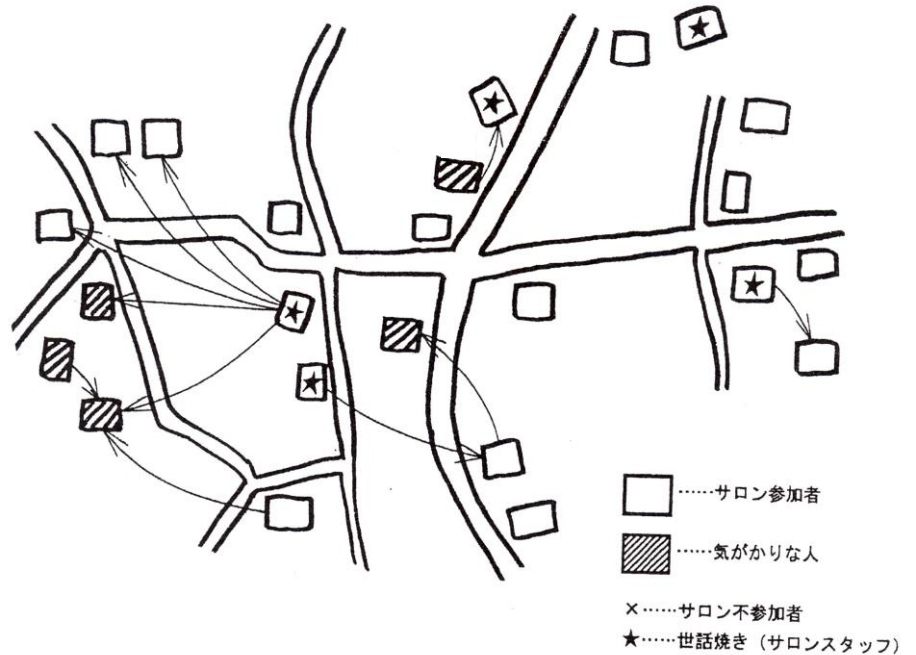
- ①私共は「福祉」を追及している。ふれあいサロンもその「福祉」の一環として実行すべきである。サロンは（特にご近所の人たちが寄り集まるような場合）、小地域福祉をすすめるのに都合がよい。せっかく集まったのだから、そこで助け合いをすべきである。具体的には、サロンの場で、というよりも、サロンが終わって、ご近所に戻ってからである。
- ②そこで質問すべきことは、大体決まっている。本冊子の第2部に質問事項が並んでいる。そこに並んでいることを聞いていくと、ここに紹介したような答えが返ってくる。この事例ではかなり助け合いをしているが、一般的にはこういう例はあまりない。ないけれども、それに近い事例がいくつかは出てくるはずである。それを足場にして、さらに「助け合えるサロン」へと発展させていけばいい。





聴取者

→ ふれあいサロンもここまで来れば、立派な小地域福祉活動を実行していると言うべきですね。ポイントは、各自がご近所に戻ってから助け合いをするか、その助け合いの輪にサロン不参加者も加えてあげるかというあたりですね。



14. 有償グループも助け合っているか？

- ①サロンメンバーの助け合いと同じように、有償サービスグループ（ボランティアグループでもいい）も、仲間同どうしで助け合っているか。調べてみるとおもしろい。
- ②特に有償サービスグループの場合、一般のボランティアグループと違って、介護力を持っている人もメンバーに含まれているし、要介護者の家に関わるのも慣れているので、そういう面での助け合いもやっている可能性が高い。
- ③そこで聴取すべき項目もだいたいパターン化され得るが、ここで紹介したケースの場合、ここまでやれば上出来」と言える程の助け合いが行われている。
- ④したがって、一般的な場合はこれほどの実践はなされていないだろうが、たまたま実践されていることを足掛かりにして、助け合いをさらに発展させていけばいい。

聴取者

今日は有償サービスグループのメンバーでマップづくりですね。では、この界限でメンバーの家に印をつけましょう。

→メンバー宅に緑色の印がつけられる。

聴取者

140世帯の中に15人か—1割は仲間なんですね。心強いでしょう。でも普段、実際に仲間同士で助け合っていますか？

住民

まずAさんは一人暮らしでちょっと気になる人なので、階段を共有する仲間が面倒を見ています。Bさんは、要介護の奥さんの介護をしていて大変なので、このあたりのメンバー全体でサポートしています。

聴取者

なるほど。それでは、有償サービスのメンバーでない人に対しては、どうですか？

住民

やってますよ。例えばCさんは認知症の奥さんの世話をしているので、同じ棟の私たちの仲間がサポートしています。この人には家族の会や、この団地の介護福祉士の方も関わっています。趣味グループの方も来ているようです。

住民

Dさんもメンバーじゃないんですが、一人暮らしで病気がちなので、隣の棟の私たちの仲間がサポートしています。この仲間は同じ棟の母子家庭の支援もしています。

聴取者

いやあ、素晴らしいですね。皆さんはある程度の介護力のある方々ですから、このように要介護の方にも対応できるのですね。それに、皆さん以外のグループも関わっている。これらのグループが連携すれば、住民の手で地域介護ができますよね。

聴取者

段階的に言うと、①まず仲間同士、ご近所の中でも助け合う、次いで②その助け合いに、メンバー以外の方も入れてあげる。そして③それらの対象に関わっている他のグループとも連携する—ということになります。

聴取者

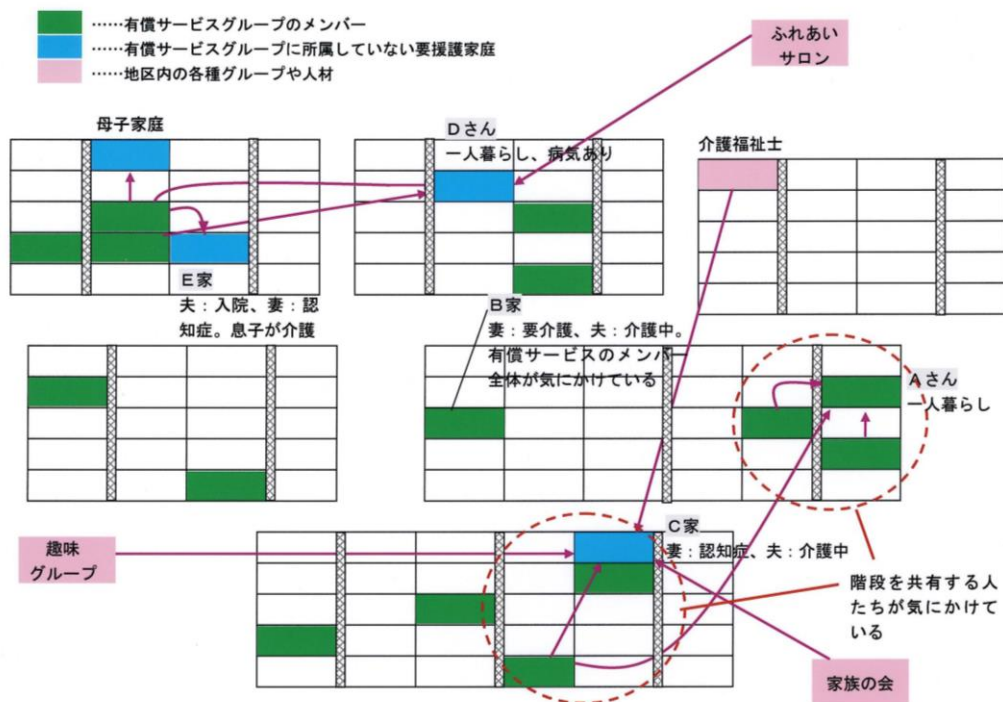
現実に今、ふれあいサロン、趣味グループ、家族の会の名が挙がってきましたが、他にもどんな組織が（足元の対象者に）関わっていますか？

住民

定年退職者でつくるゴルフの会、学校支援ボランティア、PTA、食事サービスグループなどです。

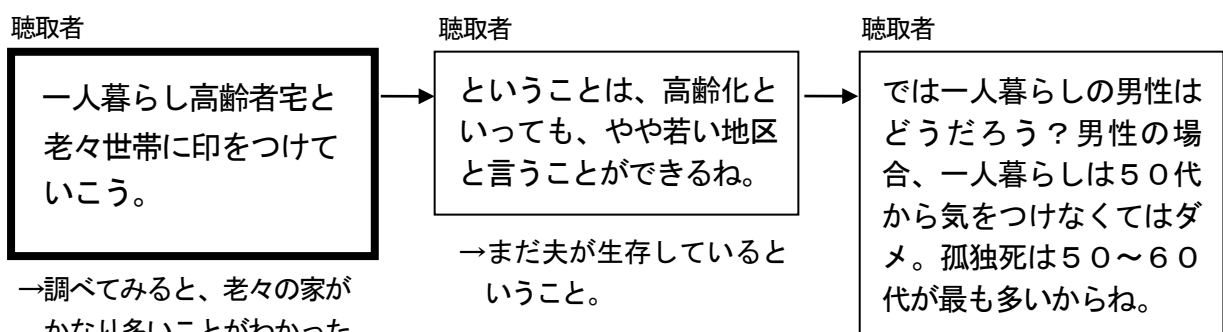
聴取者

ずいぶんいますね。これらのグループと連絡協議会をつくって、この界限での助け合い—それも要介護者をサポートできるぐらいの助け合いを、一緒にすすめていけばいいですね。



15. 団地の住民に何を尋ねるか？

- ① 「いずれはこの団地を出る」 — という場合は、そこで助け合いをすすめるよう説得するのは難しい。反対に、「ここ以外に行く所はない。ここで一生を終えたい」という考え方で住民が一致している場合は、思い切って、その団地を1つの老人ホームとみなして、徹底した助け合いをするように勧めることが可能になる。
- ② その場合にどういうふうなことを尋ねていくかは、フローチャートを見ていただくとして、問題は「ご近所老人ホーム」に到達する道筋をどうやってつけてあげるかだ。そこで今、現在どんな助け合いをしているか、そのためにどういう体制をつくっているかから聞いていくといい。それを足掛かりに、もう一步、さらに一步と進めていくように導くといい。



聴取者 → それぞれの男性をだれが見守っているか調べてみよう。気になる男性はいるかな？

住民 → 私の階下のこの人が難聴で、音楽を聴くのにものすごい大きな音を出して迷惑している。補聴器が壊れているみたい。

聴取者 → 補聴器は大抵使われていない。一度、業者と交渉しなくちゃいけないね。

聴取者 → その他、一人暮らしの人はどうやって安全を守っているだろうか。皆さんの中にもいるでしょ？

住民 → Aさん「私は携帯で娘と毎日通信している」
Bさん「私（老々）は、隣の一人暮らしの女性のカギを預かっている」といろいろ出てきた。

聴取者 → カギの預け合いが広がっているようなので、これを棟全体ですすめてみたらどうかかな。

聴取者 → それぞれ誰かが安否確認をしているようだが、いざ異変が生じた時、だれに連絡したらいいだろうか。

聴取者 → それなら、16室ごとの世話焼きさんをキーマンにして、そのキーマンをたばねる大型世話焼きが最終的に協議して、関係機関に連絡すればいいわけだ。

聴取者 → ここは老々世帯が多いけど、老後を夫婦で楽しく生きていくことを考えるのも福祉だよ。何か考えてない？

→この棟は、左右4室、上下4室の16室ごとにある程度独立していることが分かった。

住民（リーダーのKさん） → この棟で居酒屋をひらこうかなと思っている。

聴取者 → それはいいね。そこで夫婦が楽しむだけでなく、この棟には中国人が多いから、彼等も仲間に入れたらどうか？ 彼等に餃子やラーメンの作り方を教えてもらってもいい。

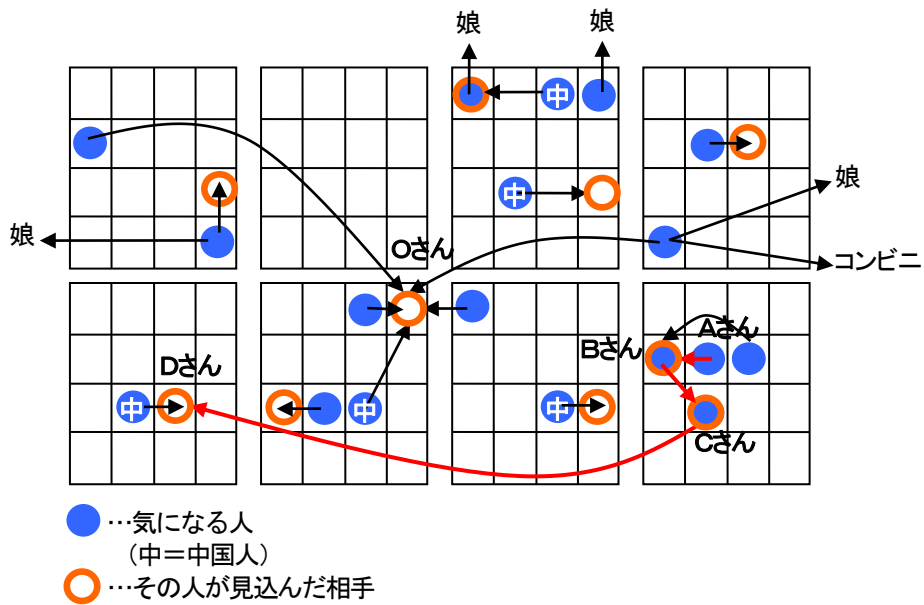
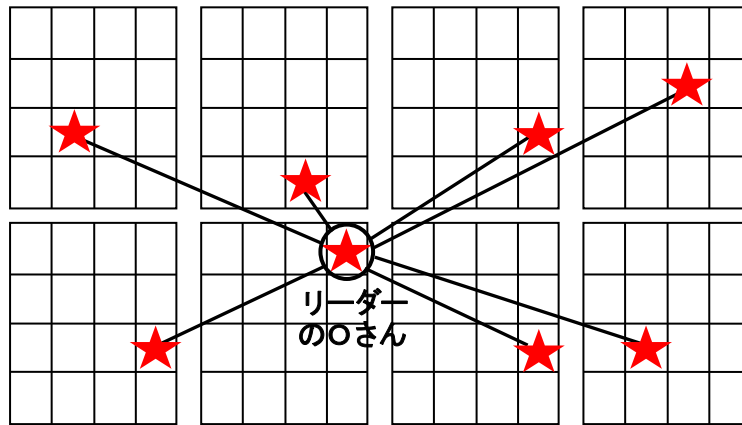
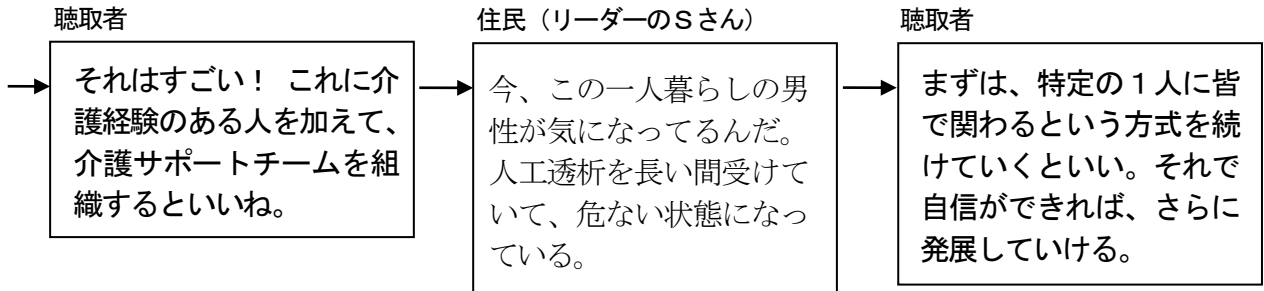
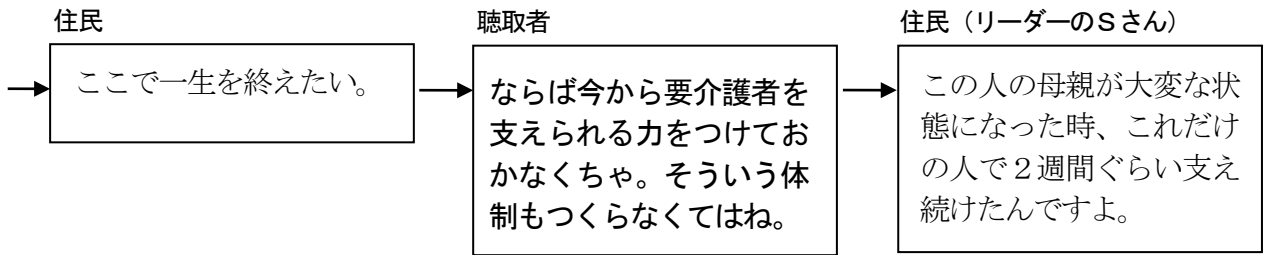
住民（リーダーのKさん） → すぐに居酒屋というわけにはいかないから、とりあえず1回、パーティーを開こうかと考えている。

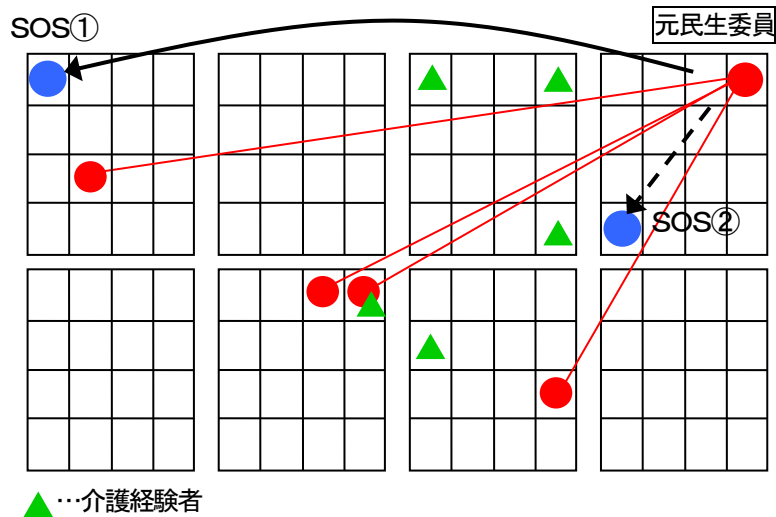
聴取者 → それはそうと、中国人はいろいろ困り事があると思うけど、どうしているのかな。

聴取者 → とすると、彼等の悩みの中心が設備の修理の問題だと分かったわけだから、これに対応するシステムを作るといいね。

聴取者 → 皆さん、老々が多いけど、一人暮らしも少なくない。いずれ要介護になったらどうするつもり？ここを出る？老人ホームに入る？

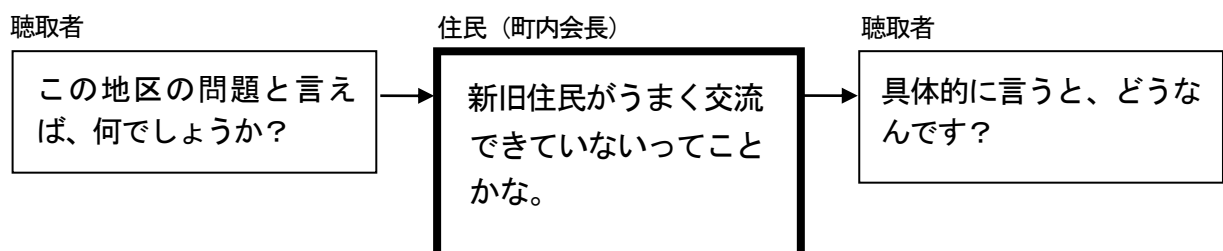
→調べてみると、多くは隣室の日本人に相談を持ちかけていた。大抵は修理の問題だった。

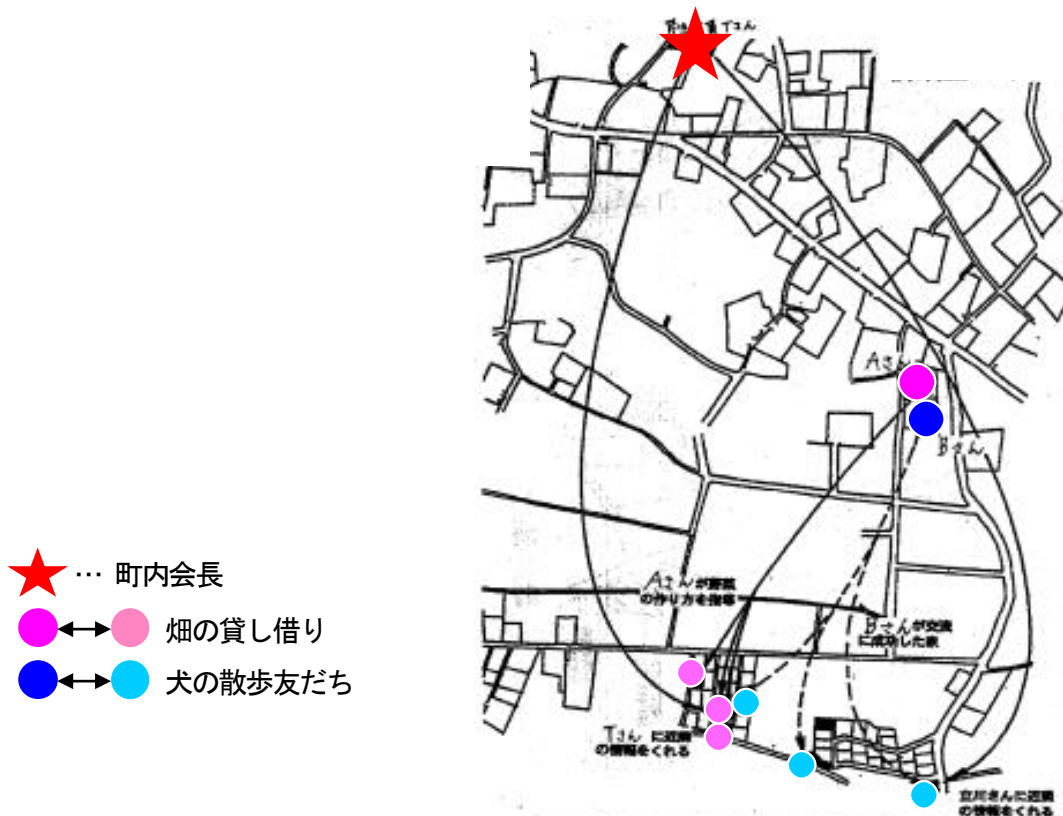
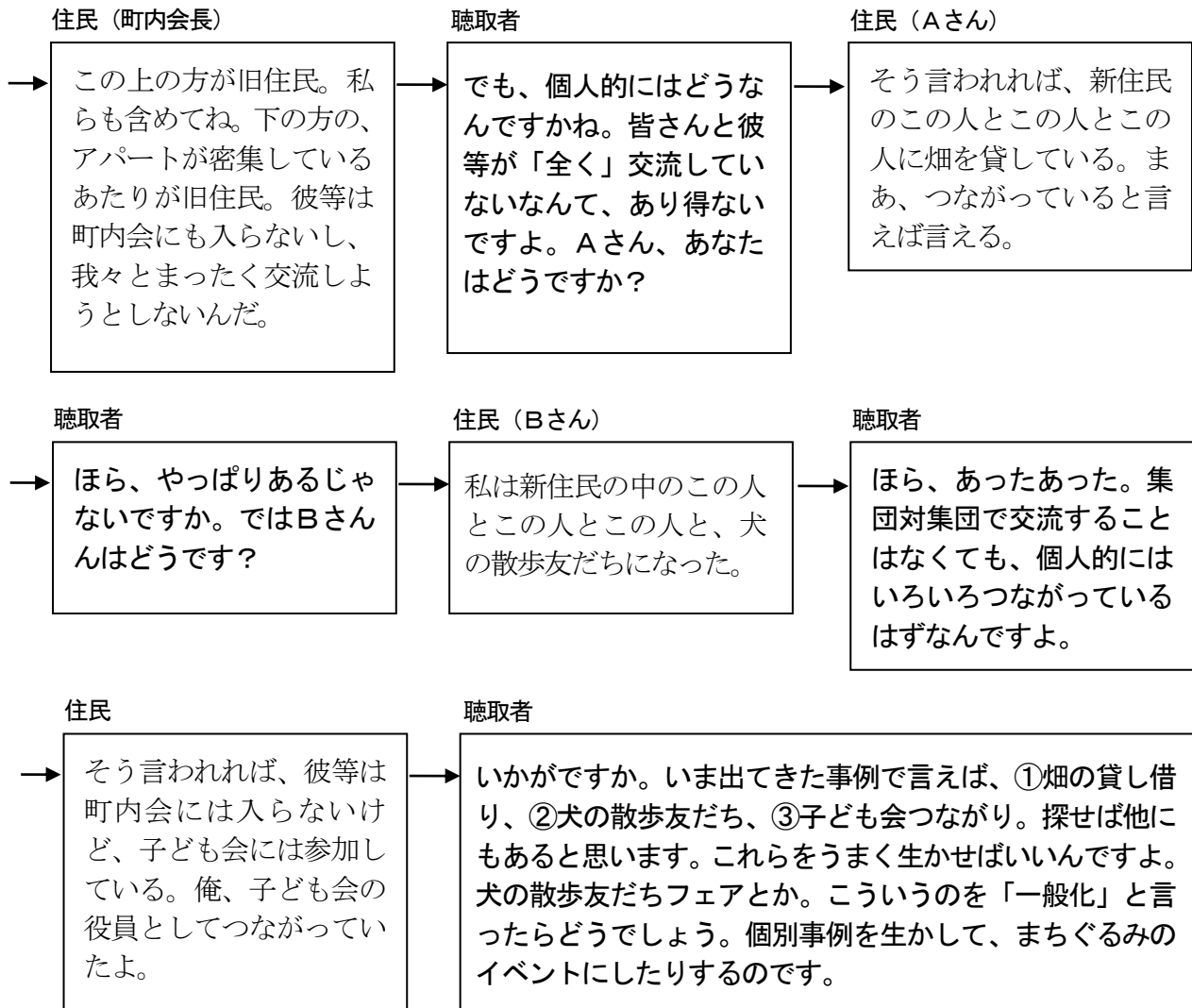




16. 「新旧住民の交流ない」にどう対応？

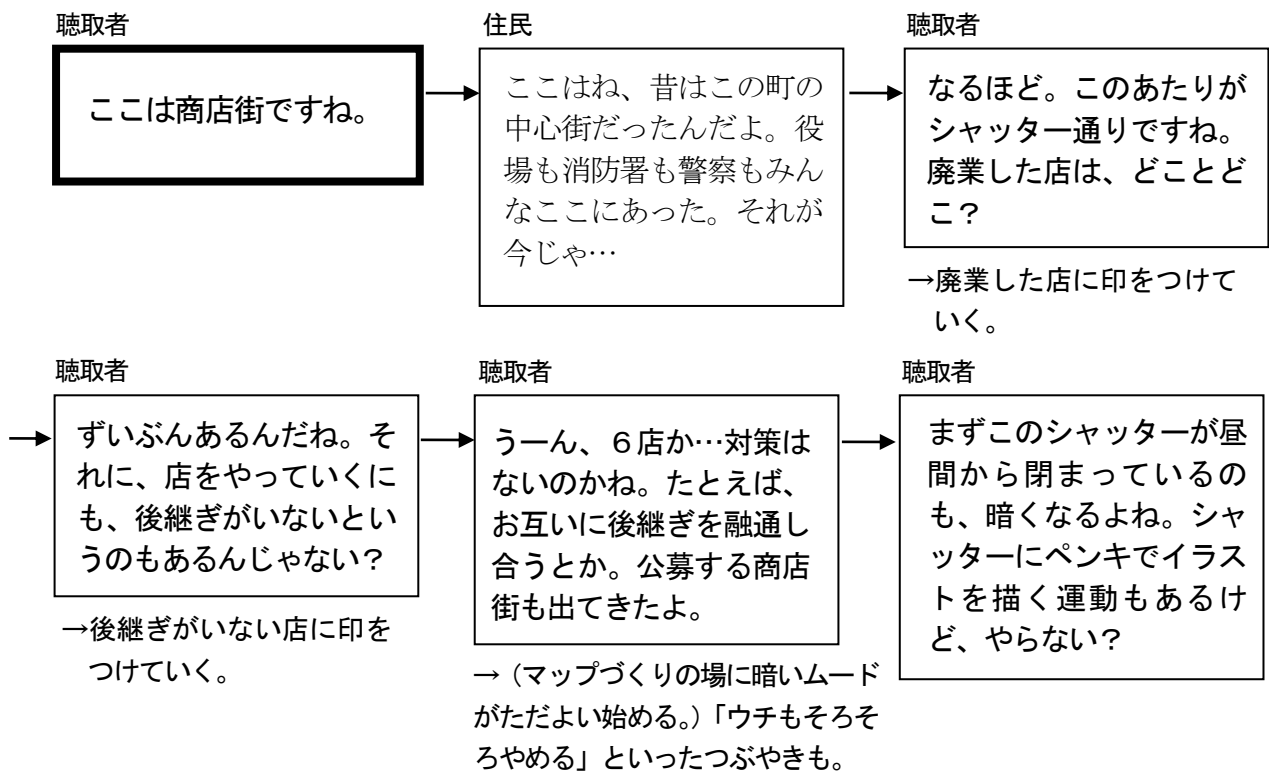
- ①マップづくりで難しいのは、こちらが聞いたことに対して、住民が「そういう事実（事例）はない」と答えた時である。「そんなことはない、きっと実践されているはずだ」と反論しても、「ないものはない」と言われてしまえば、それ以上追及できない。こちらはその土地のことを知らないのだから。
- ②その時にとれる唯一の方法は、「例えばこういう事例はありませんか？」と聞いてみることである。すると「そういう事例ならある」という答えが返ってくる可能性があるのだ。
- ③この事例では、そういう呼び水を出すまでもなく、参加者の一人ひとりに問うていったら、出てきた。ポイントは、意図的、集団的な交流でなく、個人的に交流していないかと聞いたことだ。「そういえば、あの連中に畑を貸している」ということを思い出したのだ。
- ④だから、どれだけの事例を引き出せるかは、こちらの腕にかかっているのだ。

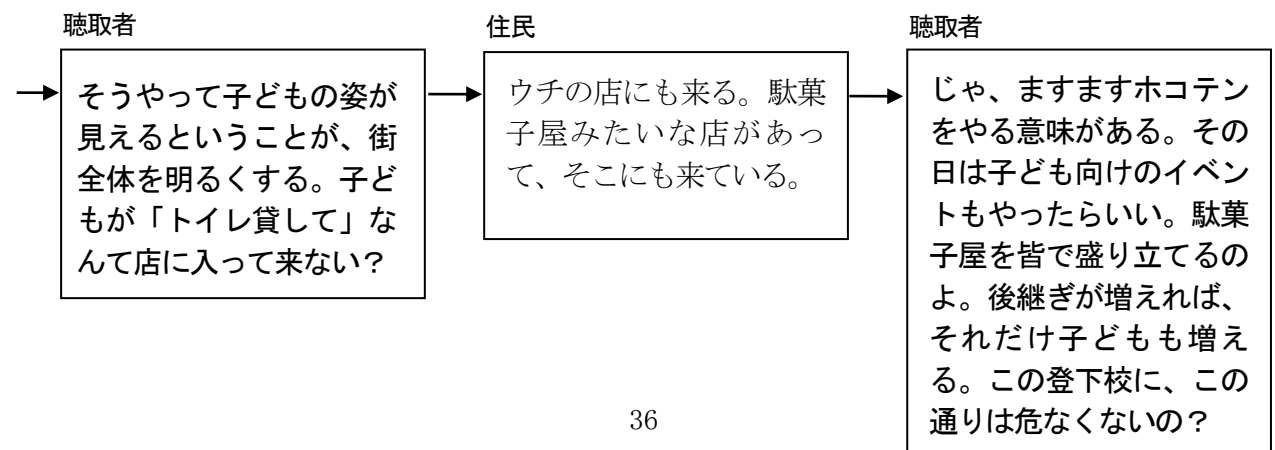
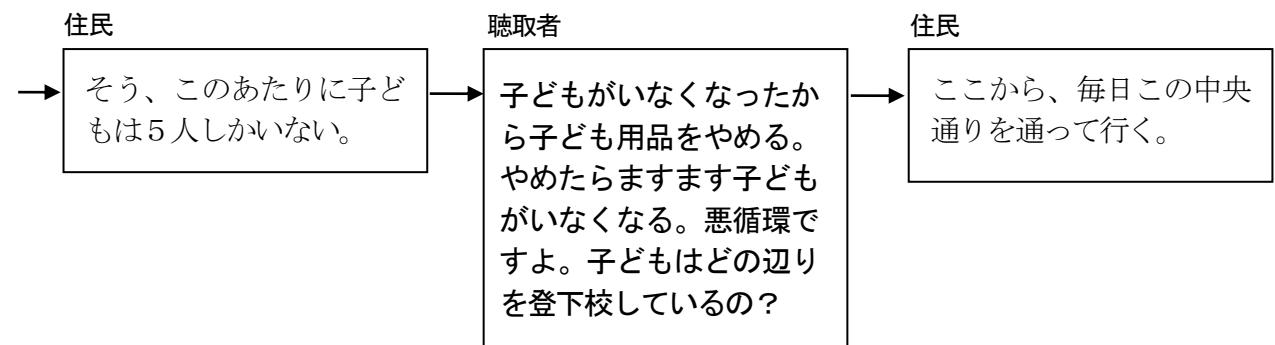
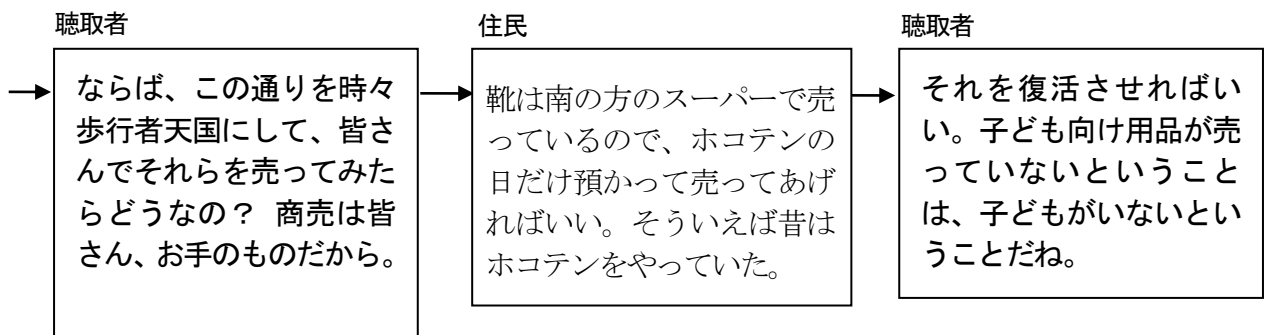
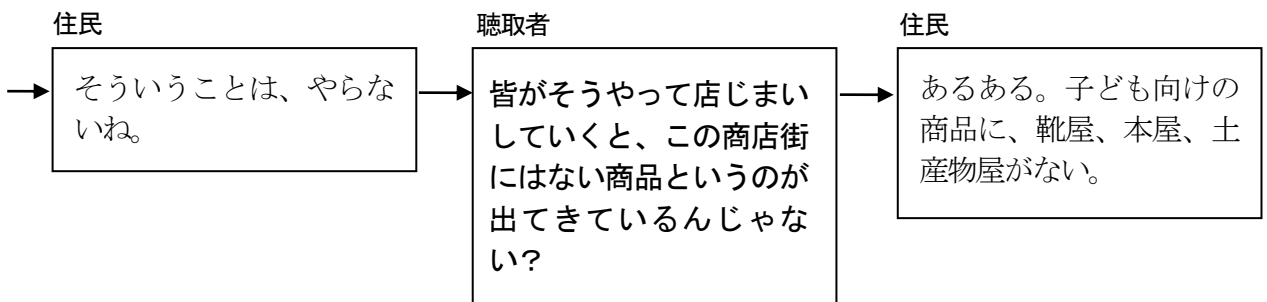
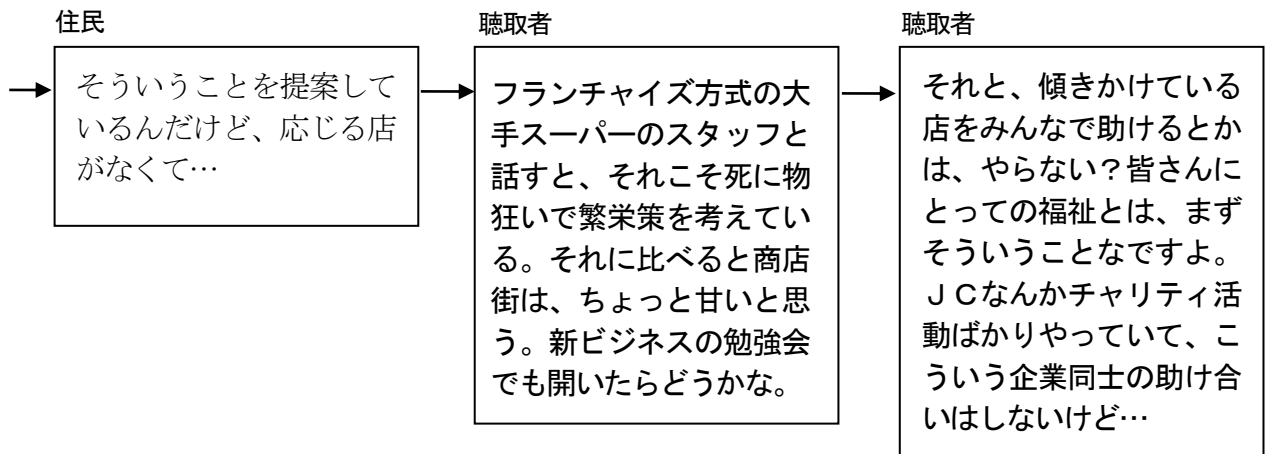


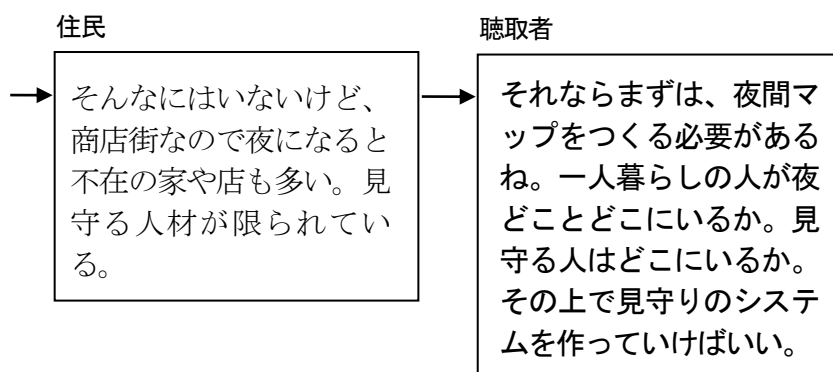
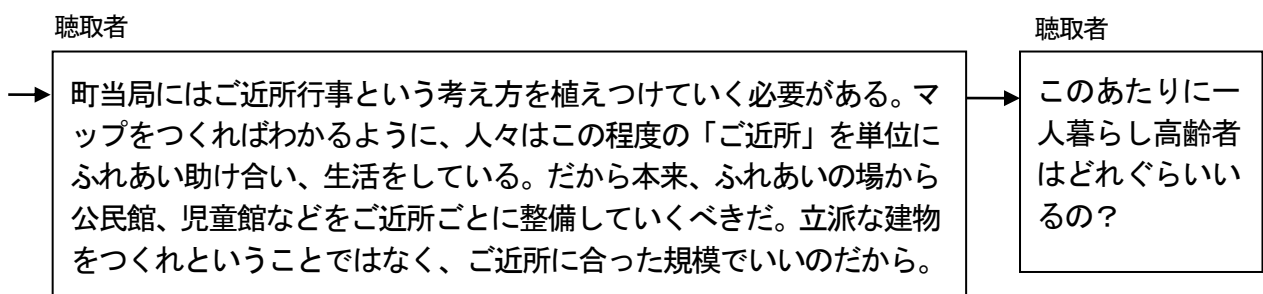
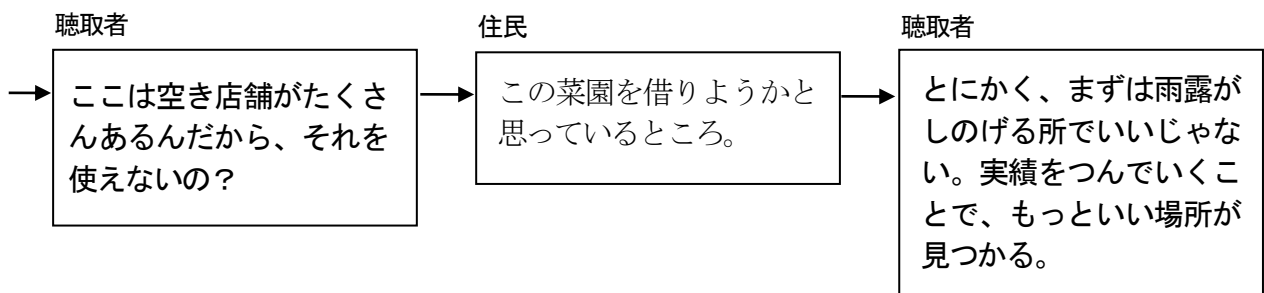
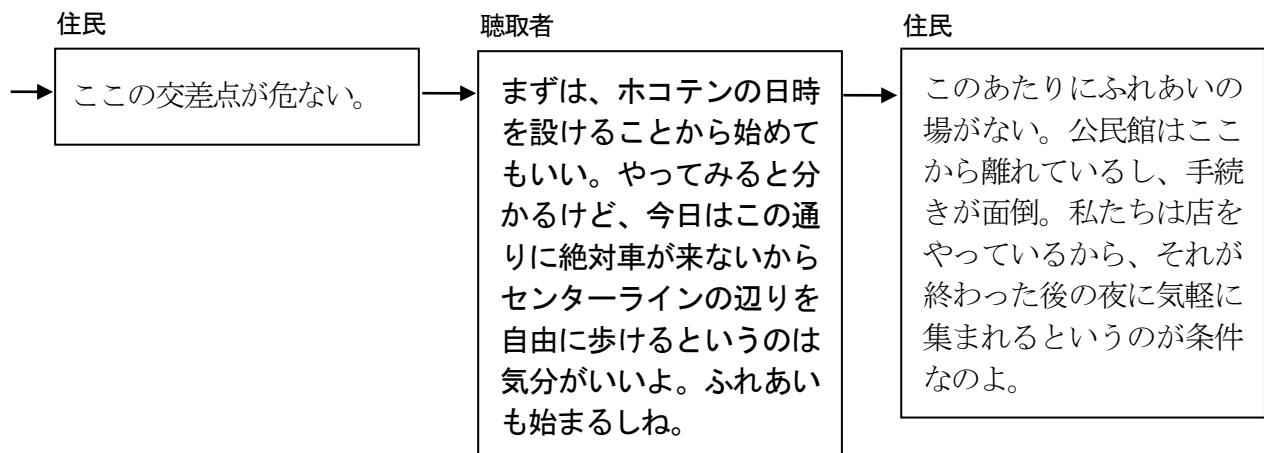


17. シャッター通りの商店にやる気を

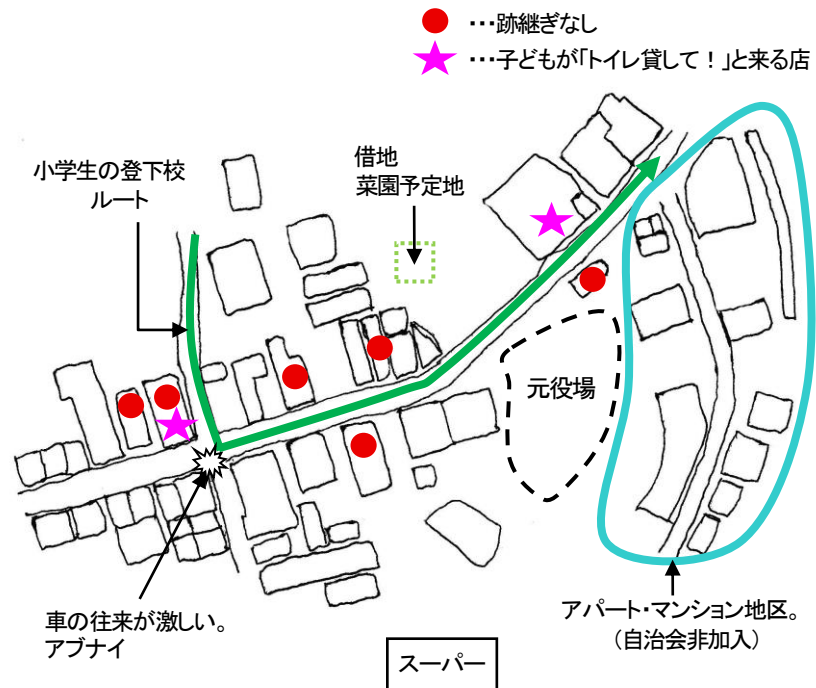
- ①後ろ向きの姿勢で住民がマップづくりに参加した時、なかなか議論が進まないことが多い。「こんなことをしたらどうか?」と言っても、「どうせこのまちはダメなんだから」と、あきらめ顔で返される。
- ②自分もどうせ、いずれ老人ホームに入るのだから」と将来に展望が開けない場合もそうだし、空洞化する商店街の人たちにまちの繁栄策を説いても同様だ。
- ③そういう場合は、とにかく少しでも希望を持たせるよう話や事例をどんどんぶつけていくことだ。そこで少し、乗り気になったところで、彼等の実践からそれらしいものを引き出す。「可能性はあるかも」と腰を上げたところで、一緒にアイデアを出し合うのだ。
- ④この「空洞化する商店街」の店主たちとマップづくりしたとき、初めは敢えて暗い話を並べていった。暗い雰囲気になったところで、反転攻勢をかけることにした。「腫れものに触る」ように相對しても、本気にはなれない。







[注] 「ホコテン」は歩行者天国のこと



18. 少子化のご近所にどんな対策を？

- ①高齢化が進んだということは、裏返せばそれだけ少子化も進行したということだ。奇妙なことに、「高齢化」の対策はいろいろ講じられているが、「少子化」対策となると、とたんに消極的になる。というよりも、「打てる手はない」とあきらめムードになっている。
- ②支え合いマップづくりは、ただそのご近所の福祉の実態を明らかにするだけでなく、その対策のヒントも聴取の過程で見つけ出さねばならない。そのヒントをもとにそのご近所なりの少子化対策を練る必要がある。
- ③そう考えた時、確かにご近所の実態の中で、少子化対策のヒントになりそうなものが見つかった。それはそうだ。以前はそんな問題はなかったし、子ども向けの資源もそろっていたはずだし、その一部が残っていると考えるのが自然なのだ。さて、どんな質問をし、どんなヒントを見つけ出したか？

聴取者

60世帯で、高齢化率が36%、それにしても子どもの数が少ないねえ。

住民

だって、ここにも仕事がないんで、若者が皆、去っていくも仕方がないですよ。

聴取者

それじゃ、このご近所に最近戻って来た若者はいないかね。中年でもいいし。

住民

→ いない。(誰からも声が上がらない)

聴取者

よく、娘が離婚して子連れで戻ってきたという話を聞くけど。

住民

この家はそう。子連れで戻って来た。この人も子連れで。この人もこの人も…

聴取者

→ なんだ、4人もいたじゃん。考えてみれば1人あたり平均1.5人の子どもを連れて戻れば、一挙に6人も子どもが増えるんですよ。こんなありがたい話はないじゃない。彼女たち、家はどうやって探しているの？

住民

この人は空き家を改造して入居した。この人も…

聴取者

なるほど、このご近所は空き家が多いから、こういうふうに生かせばいいんだよね。

聴取者

→ 彼女たちは、仕事は何か見つかったの？

住民

この人は実家の家業を継いだ。この人はヘルパーの仕事をしている。

聴取者

このご近所は高齢化しているんだから、娘に戻ってもらってヘルパーの仕事に就いてもらえば、ご近所も助かる。こういう母子向けのヘルパー2級講座を開いたらどう？

聴取者

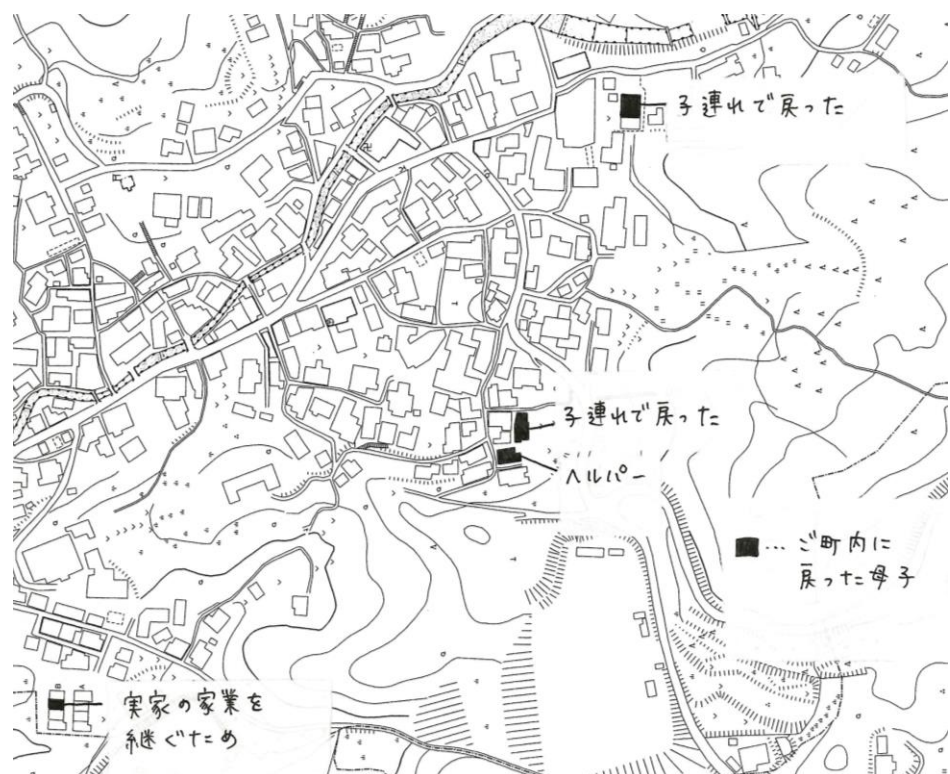
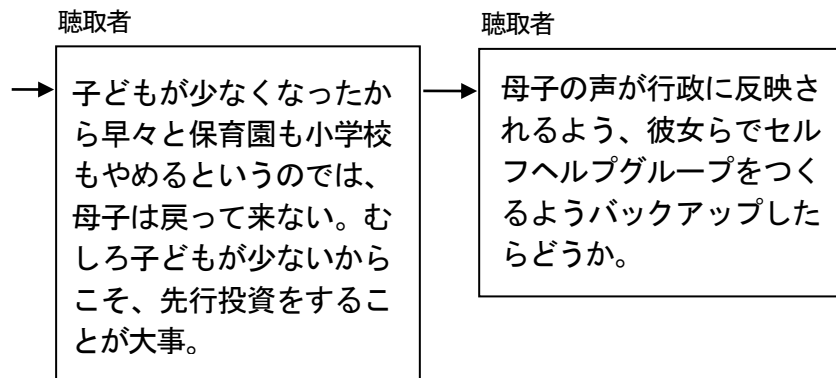
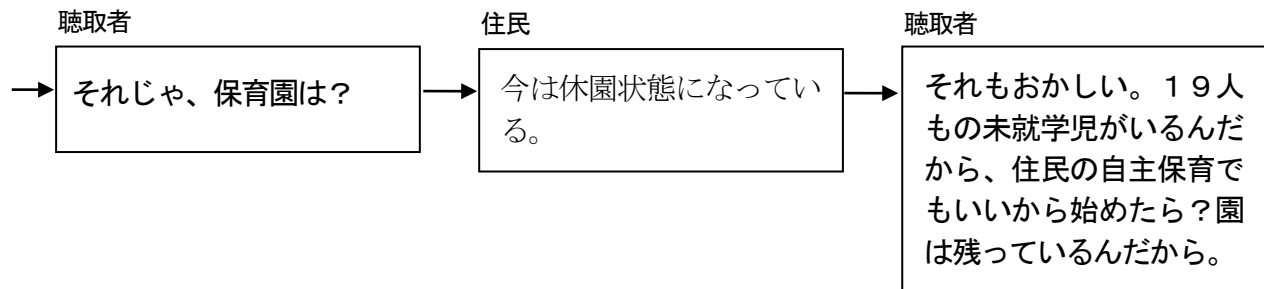
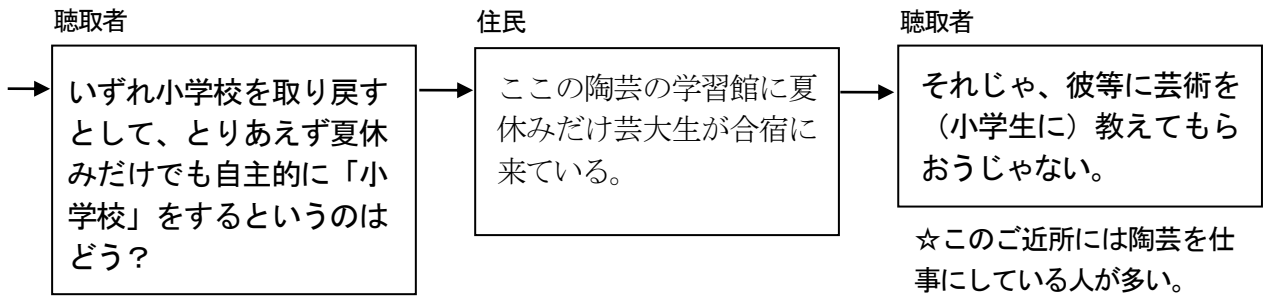
→ で、ここは小学校がないの？

住民

統合され、校舎だけが残ってる。子どもは数キロ離れた小学校にバスで通っている。

聴取者

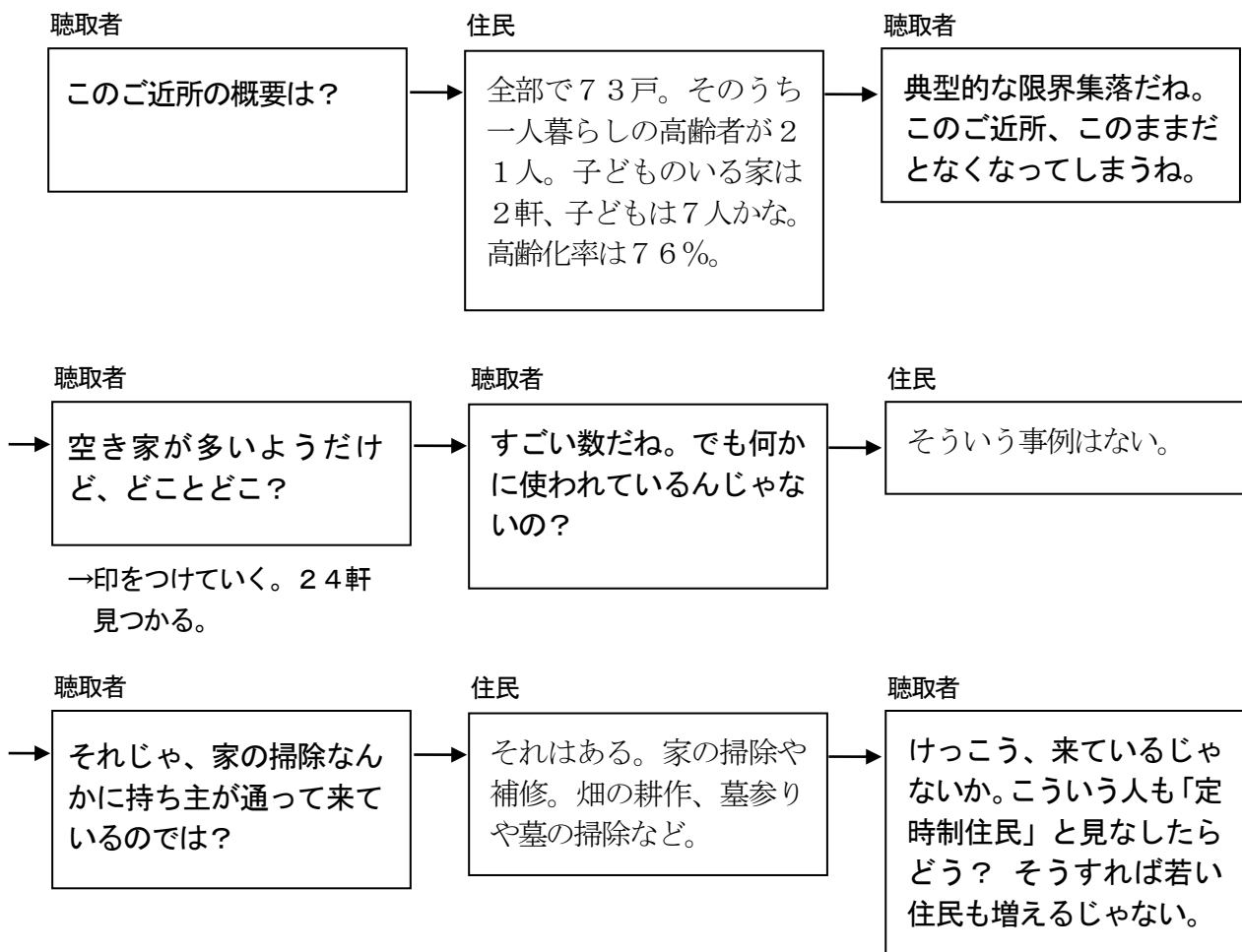
それはおかしい。だってこのご近所だけで23人も小学生がいるんだから、1つの小学校は成り立つよ。これじゃ母子も戻りにくいじゃない。最近は無理に統合しないで、特定の科目だけ中央の小学校でやるという方式が出てきている。

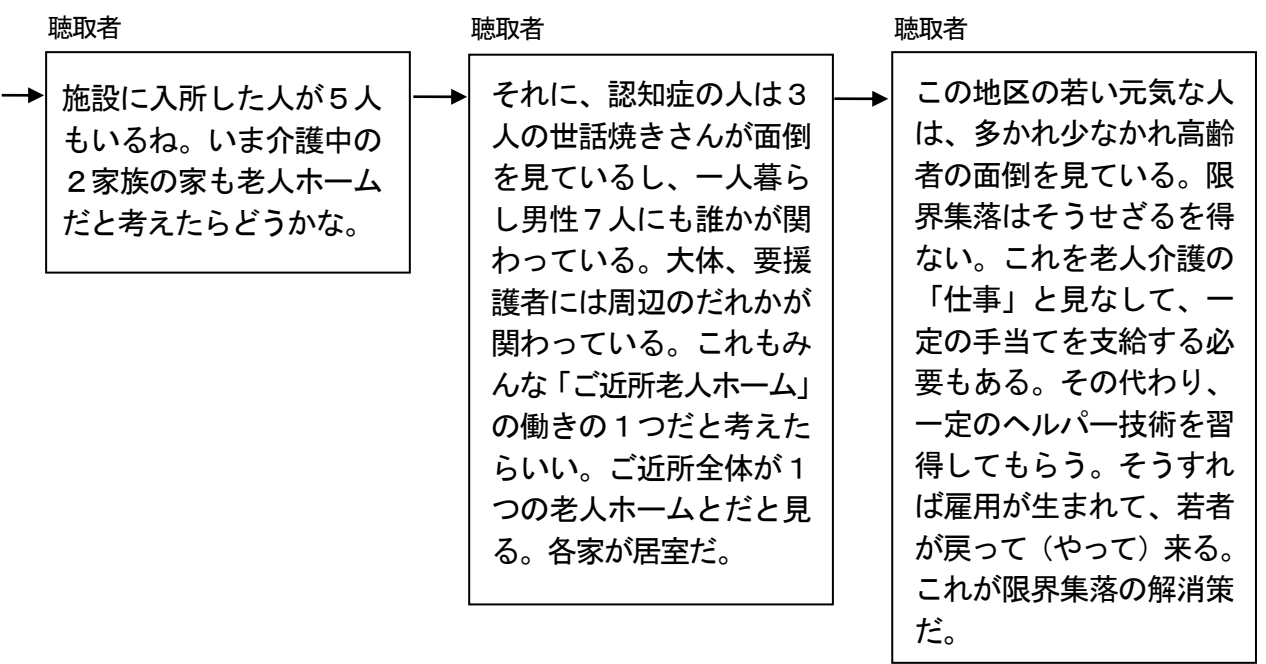
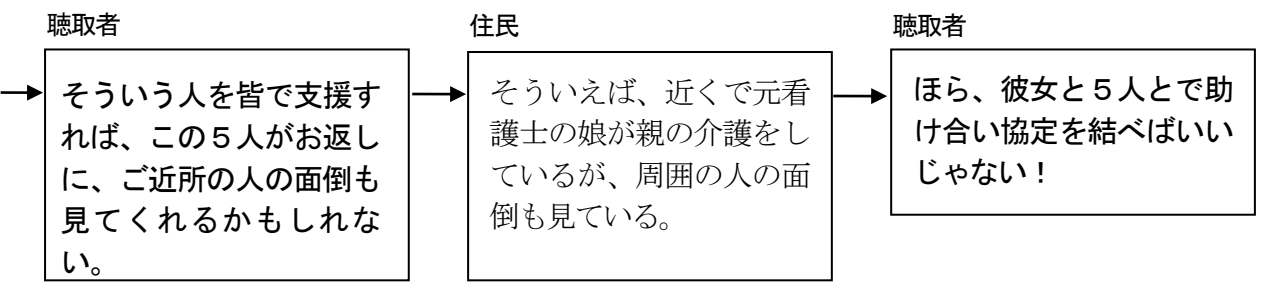
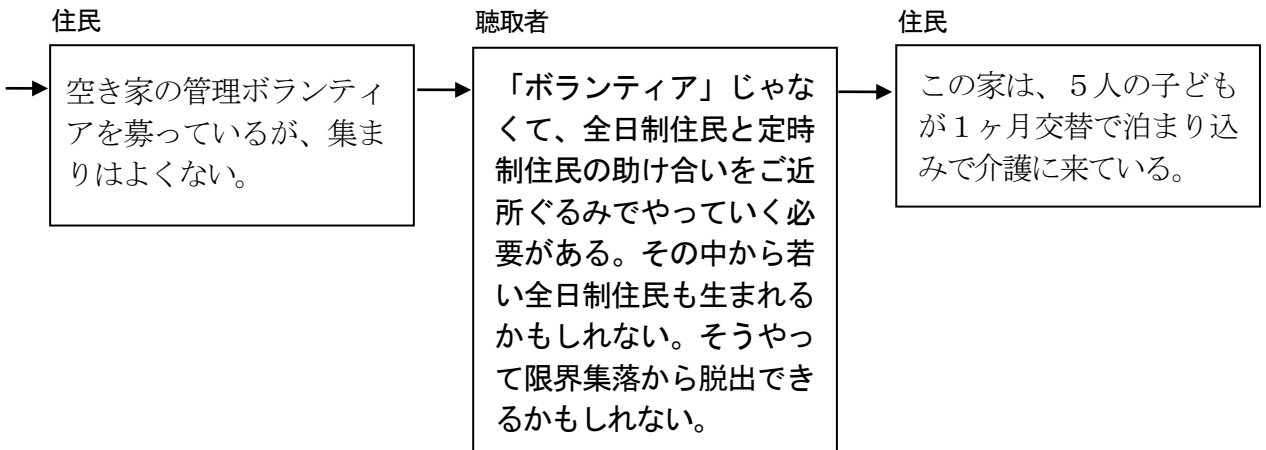
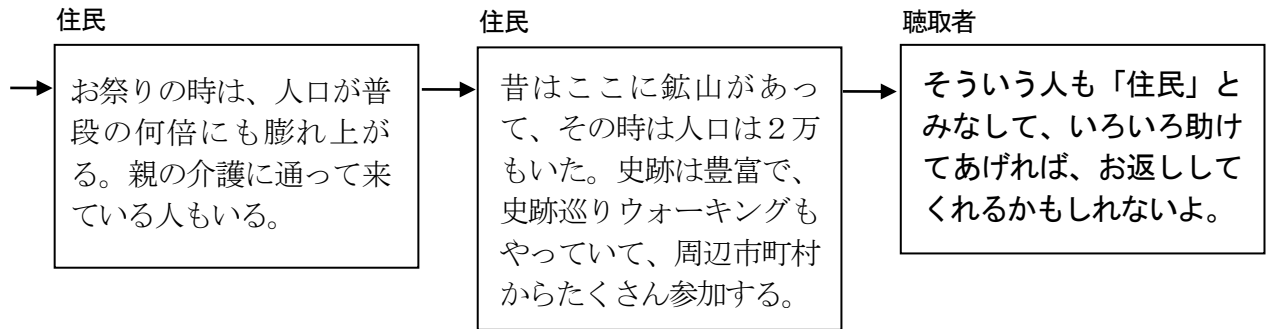


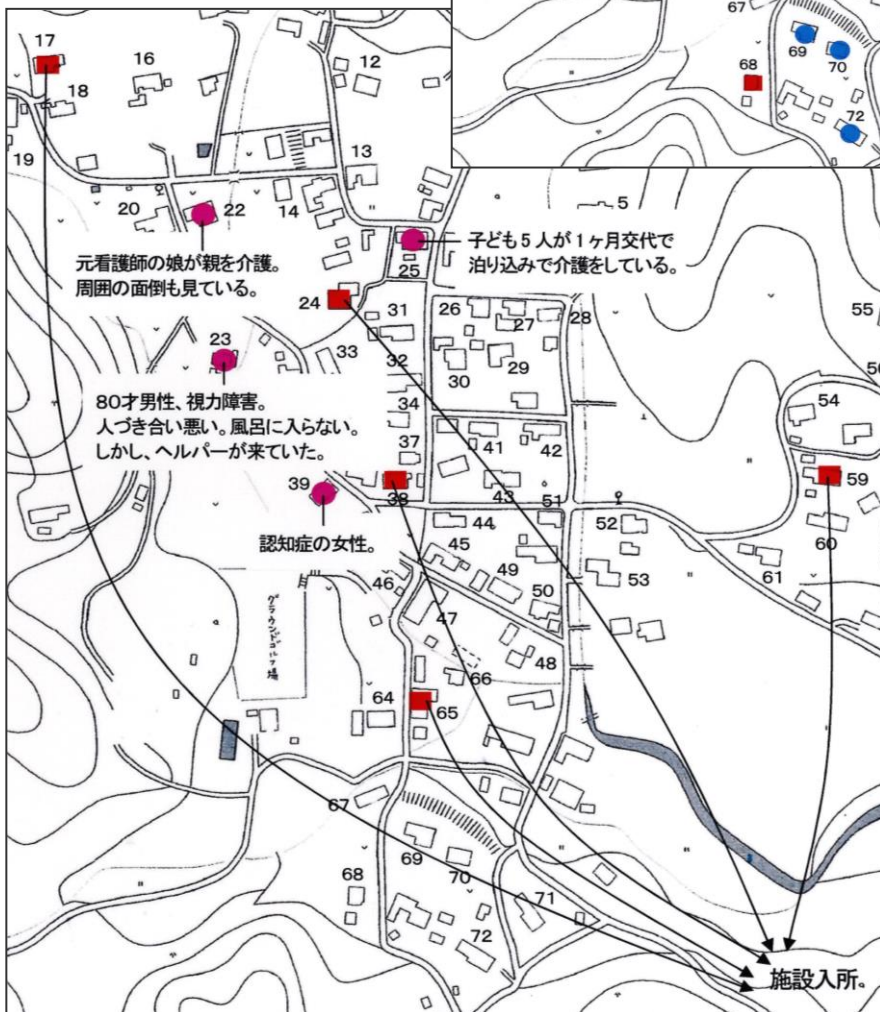
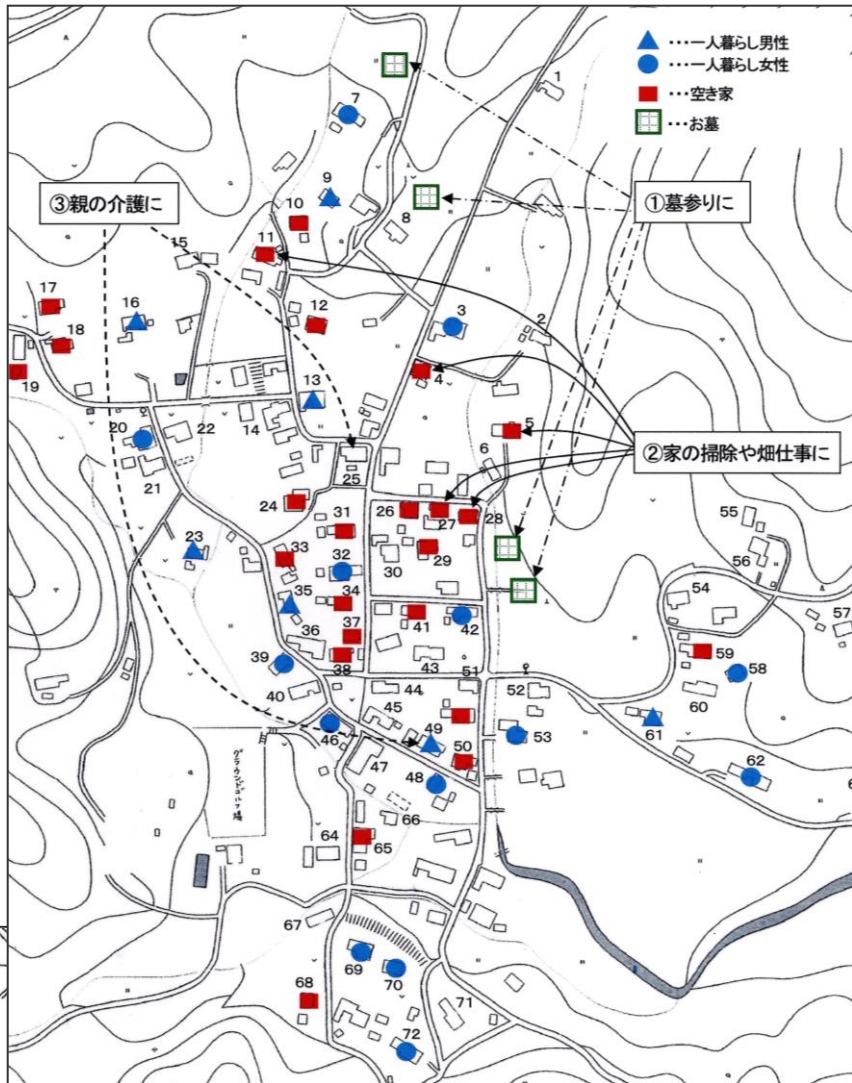
19. 限界集落からの脱出策を考え出せ

①「限界集落」でマップづくりをする時は、ちょうど「空洞化する商店街」と同じように、一人暮らし老人の見守りをどうするかといった狭義の「福祉」のことをばかり考えていても仕方がない。文字通りの「まち起こし」策を練る必要がある。そのためには、本来なら行政のあらゆる部局の人がマップづくりに参加するのが筋というものだ。

②「限界集落」からの脱出策を図るといのは、尋常な方法ではだめで、思い切った発想の転換が必要だ。たとえば、いくら限界集落といっても、一時的にやって来ている住民はいる。空き家の管理、観光客、親の介護のためなどだ。これらの人たちを「定時制住民」と考えたら、そこから新しい展開も生まれる。





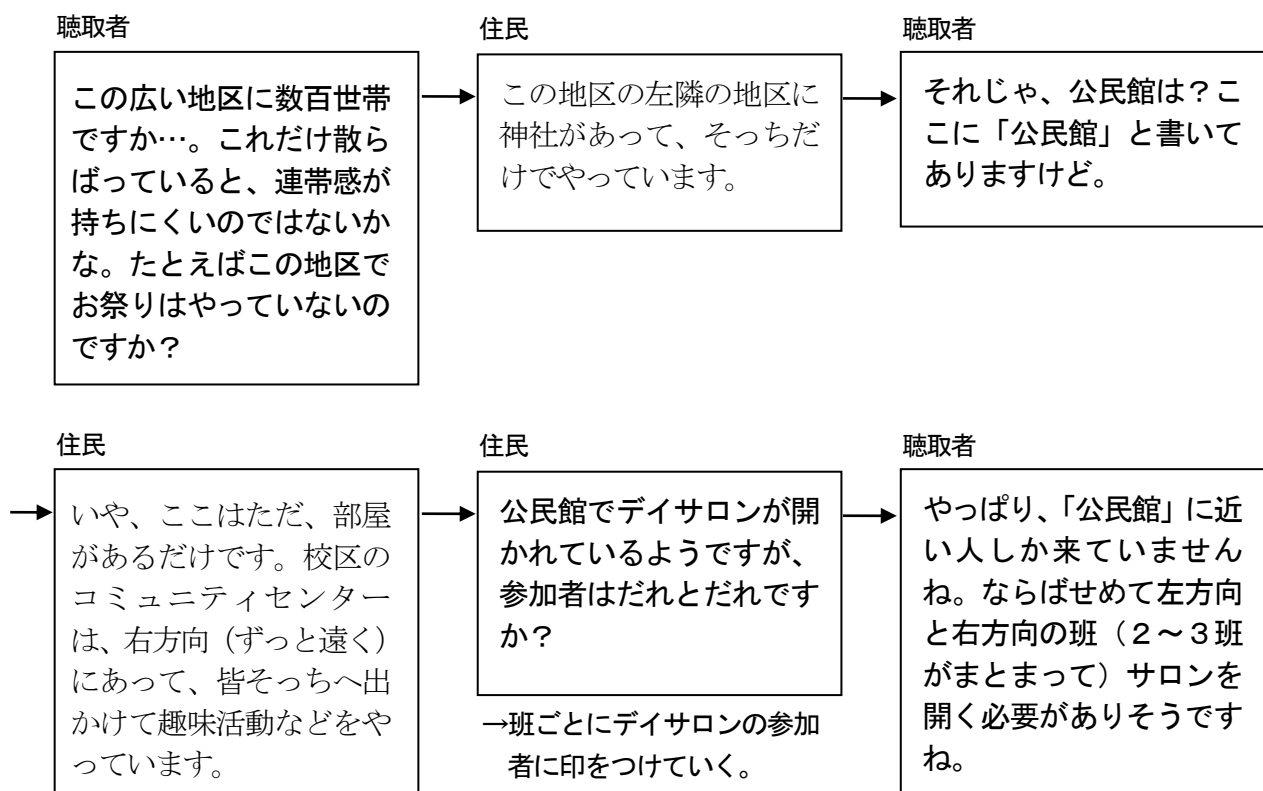


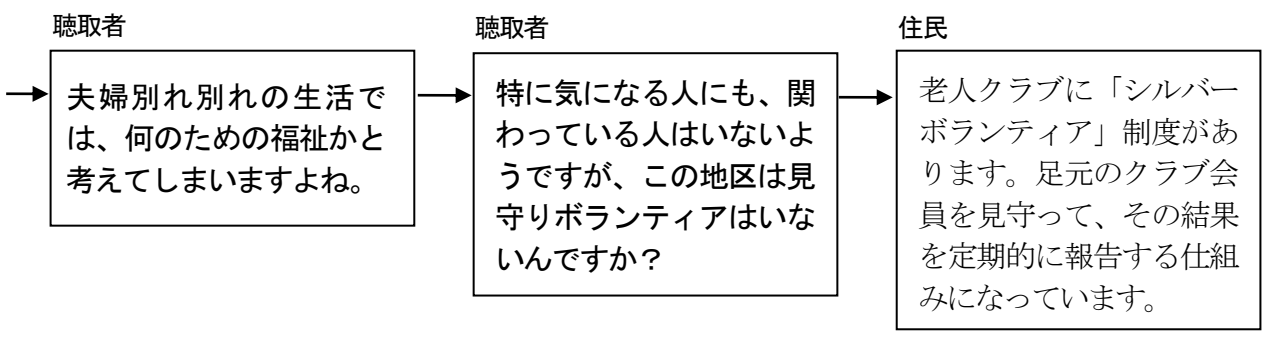
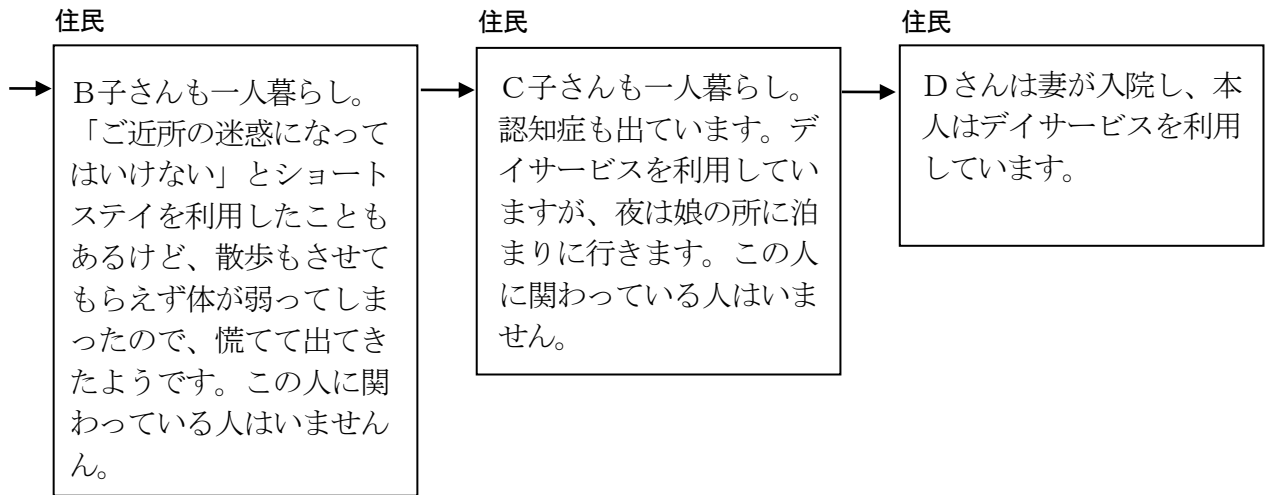
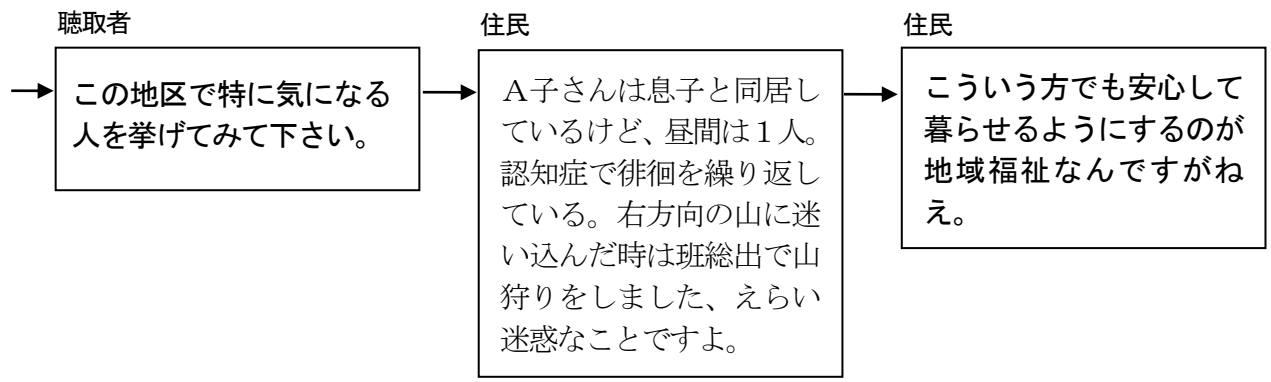
20. 支え合いマップは手品ではない

①支え合いマップづくりは、手品ではない。とにかく住宅地図を前にすれば、たちどころにご近所の真実が浮かび上がってくる—ということはありません。

②それには条件があるのだ。すでに各所で触れているように、50世帯程度のご近所に限定して、そこに住んでいる住民（女性中心に）が4、5人集まらないことには、作り上げたマップは「本物ではない」ということになってしまう。

マップ上に何人かの気になる要援護者が現れたが、どの人についても、関わっている人はいないと参加者は言う。しかし、本当のところはそれらの当事者の隣人に聞いてみないと分からない。1人が見えている範囲はせいぜい10数世帯である。今回のマップづくりのように、こんなに広い地区から数名が来ただけでは、どう考えてもマップづくりは不完全なものにならざるを得ないのだ。





☆別図に仕組み

